

この返歌を彼と自分は一所に見て、初めて逢つただけなのに、たびを重ねたと云ふ意味になつてゐるのは可笑しいと笑ひ合つたものであつた。其れから後の彼女に就いて別に著るしい刺激を受けた事もないのか自分は何も覺えてゐる事はない。どんな手紙に對する返事であつたのか、

置き添ふる露に夜な夜な濡れこしは思ひの中に乾く袖かは

と云ふ彼女の歌があつた。自分に對しても薄情な彼は、まして彼女のことなどは忘れはててしまつた。後に自分がそれとなく彼に聞いて見た時、「あの女が女の子を生んだのだよ。さう知らせて來た。さもあることだと思ふ。あなたが引き取つて世話をしてやつたらどうだらう。」などと彼は云つた。その子に違ひない。是非其れを自分の手で養はうと思ふやうになつて、その話をした親戚に頼まうとすると、「この話を自分へ聞かせてくれた人は死にましたよ。娘さんは十二三になつてゐるさうです。唯だその子一人を伴れて、湖水を前に見る志賀の山の麓で、云ひやうもない心細い生活を彼女はしてゐるのださうです。」と云ふことを云つた。聞いて自分は他人のこととは思はず氣の毒で、どんなに悲しんでゐるであらう、彼を恨めしがつてゐるであらうと先づその子の母を悲しんだ。彼女の異腹の兄は僧で、京に住んでゐたが、自分の親戚の人が知つてゐたので呼び寄せて相談をさせると、「それは誰れも異議のない結構な事で、その女の子の幸福になる事に違ひありません。ああした寂しい田舎へもう幾月も引籠つてゐますのも、人生ははかないものだとして、この娘も尼にすることにしよう」と母親の心では思つてゐるからのことです。」などと僧は云つた。直ぐその翌日くらゐに山を越えて志賀の隠れ家へ禪師は行つたのであつた。異腹であつたからさう親しくもせぬ兄がわざわざ訪ねて來たのを彼女は先づ訝つた。「何のことで來て下すつたのでせう。」などと云ふから、暫くして僧は自分の申出を彼女に話すと、諾否は云はずにどんな氣がしたのか先づ非常に泣いて、それからやつと、

「もう命がいくらもないやうになりました自分のことは、初めから薄命な生れだつたとして何とも思ひませんが、こんな所にこの人までも落ちぶれて暮させてゐるのが悲しくてなりませんでした。然しそれもどう助けられやうもない事としてゐるのですが、そんな話があるのでしたら、どうとも、この儘にしておくか、さうするかどちらが好いともあなたが判断をして決めて下さい。」かう云つたさうである。次ぎの日に僧は歸つて來て、その通りの報告を自分へしてくれ

たのである。「女の子のためには非常に幸せなことです。あなたと前生からの縁があつたのでせう。かう云ふ風にお話が進んだのですから、私の心細い妹にとにかくもお手紙を一つ遣つて下さい。」と云ふので、自分も思ひ切つて手紙を書いた。

「唯今まで長い間直接の御交際は致しませんでした。間接にはよく御様子を知つてゐたあなたでいらつしやいますから、あなたの方でも私に親みをお持ち下さることと思ひまして手紙をさし上げます。今度は失禮なお願ひを致したので御座いますが、其れは私が禪師様に子の少い心細さをお打ち明けしました所が、そんな風に私の爲めに計つてやりたいと仰せになりました、あなたへ話をお傳へ下すつたのでした。其れに對してお腹立ちもなく佳いお返事を聞かせて下さいました事で、私は嬉しくてなりません。右大將の御夫人方の中で最も親みうる女としてお子様を私にお任せ下さいましと猶ほお願ひ致します。」

是れを送ると、次ぎの日に返事が來た。「喜んで」などと書かれ、私に産みの娘を譲つてくれることを快く許した。禪師が話してゐたと同じ事もまたこの文に書かれてゐた。自分は彼女が置かれた悲惨な境遇が身に沁んで思はれた。長く長く手紙は書かれてあつて、寂しい涙に霞む

目をして書くのですから、ひどい亂筆になつたとあるのも道理に思はれて哀れであつた。其れから後猶二度程手紙を送つて事が決定し、禪師が迎へに行き、彼女と娘は一先づ京へ移つて來た。自身が付き添ひもせず一人きりで娘を自分の所へ遣さうとする母心が思ひやられて自分は悲しかつた。いくら育てたいと自分が云つても、それだけで大事な子を離す筈もない。彼女は父である人に逢はせたい心から決行するのであらう。そんな望みは持つてゐても、良人としての愛の薄くなつた彼のことであるから、その娘は自分の所へ來ても父を屢々見ることの出來ないことは今までと餘り變りがあるまいと思ひ、また豫ねて自分の思ふやうに彼との關係を清算して尼になるやうなことがあつた時などには、その娘はますます失望をするであらうと考へられることに由つて、重苦しい責任の添つた氣もするのであるが、今更變更の出來ることでもなかつた。この十九日が吉日であると云つて、世話する人達が日を決めたため、自家からの迎へをその日に出した。目立たぬやうに綺麗な網代の簡単な車を用意させ、馬に乗つた侍を四人、その他の下人を多く出した。車に五位が乗つて行くのであつたが、初めから世話をしてくれた親戚の一人も同行した。今日は珍しく彼から音信があつたから來るかも知れない。同時刻になつ

ては宜しくないから此方の方が早くなるやうにするがよい、當分は何も知らせずに置きたい。そして自然に彼へ知れる目を待たうなどと五位や自分の兄と相談をして置いたかひもなく、彼の方が先きに來てしまつた。「五位は何處へ行つたのか。」と彼が問ふので、自分はいい加減に云ひ紛らして、「ずつと以前から考へてゐた事でもあつたのですから、一人しか子のないのが心細くて、人の捨てた子を貰ふことにしました。」と唯だ云つた。「ではその子を見て行かう。誰れの子なのかね。私はもう老人になつたので若い男を内へ置いて、私から離れるつもりなのだらう、あなたは。」などと戯談を云ふのが可笑しくなつて、「ではお目にかけてませう。あなたの子にして下さいますか。」と云ふと、「それはいいことだ。是非さうしよう。」と云ふ。自分も早く見たい氣がして、家へ著くと直ぐに呼び出して見た。聞いてゐた年齢の割に身體は小さくて、まだ極めて幼く見える少女であつた。傍へ呼んで、「立つてごらん。」と云ひ、立たせて見ると四尺くらの身長で、髪は苦勞して少くなつたのか下の方が細くなつてゐて、背丈に四寸程足りない。可愛くて、頭の形も美しく姿が上品であつた。彼は見て、「可憐な娘だね。名を云つてごらん。」と云ふ。是れが父なのであるから眞實のことを云へばいいのと思ふが何も云はない。自分

はもう總てを明らかにしようと思ひ、「では可愛いとお思ひになるのですね。それなら申上げます。」かう云つたから、彼はますます急に誰れであるかを聞かうとする。「まあうるさい。眞實にあつかましい。」と云ふと驚いて、「誰れに出來た子、何處で生れた子。」かう疊みかけて聞く彼れであつたが、まだ云はうとせずにあると、「若しかすると彼處あそこに女の子が出來たと云ふことだつたが其れか。」と云ふ。「それでせう。」かう云ふと、「是れは意外な事だ。もう何處へ行つてどうなつたのか解らないと諦めてゐた子なのだ。自分の娘のこんなに大きくなるまで父親が見ないでゐたなどとは。」と云つて彼は泣き出した。子供もどんな氣持がするの顔を下に向けて泣いてゐた。他の者も身に沁む氣がして、昔の小説にもあるやうなこの場面に皆泣いた。彼は單衣の袖を度度引き出して涙を拭ふのであつた。「この家は突然お出でになつたり、通つてお出でになつたりすることもお父様はしようとなさらなくなつたのだから、私がまた外へ伴れて行つて上げようか。」などと五位も戯談を云ひ、夜が更けるまで泣きも笑ひもしながら語つて、それから皆寢た。翌日の早朝歸りがけに彼はまた娘を呼び出して、「眞實に可愛い子だ。本宅の方へそのうち伴れて行かう。お父様が車を持つて來たら直ぐ飛び乗つて來るのだよ。」と戯れて行つた。

それからは手紙の度に小さい人はどうかと聞いて来るのが慣ひとなつた。この二十五日の夜の夜更過ぎに俄かに邊りが騒しくなつた。火事なのである。火元は近いと云つてゐるのをよく聞いて見ると其れは自分の妬ましく思ふ女の家であつた。その二十五六日は例の彼の謹慎日であると聞いてゐるが、「そつとお届けしに行けと仰せになりました。」と云つて使が手紙を持つて来た。濃やかな情の出た文であつた。今になつては是れ程のことさへ不思議に思はれる自分になつてゐるのである。二十八日の午後二時頃に、「いらつしやいました。いらつしやいました。」と家の者が騒ぎ出し、彼は中門を開かせ車の儘入つて来たが、従へて来た役人が多くて、その人達の手で車の簾が巻き上げられ、垂絹は左右に開かれ、轆の臺が据つて車が置かれると彼は直ぐに下り、丁度花の盛りである紅梅の枝を下から見上げて、「綺麗だ、素晴らしい。」と云ひながら家へ上つて来た。次の日を暦で數へると此處が障りのある方角に當つてゐた。「何故注意をして置いてくれなかつたの。」と云ふ彼に、「何になると思つてそんなことを私から云つて上げられるでせう。」と自分は云つた。「別の日に來ることにはないか。」と彼は云ふ。「そんなに御親切があるかどうか今後のあなたに試させて頂きます。」自分は負けずに戯談を云つてゐた。「小さ

い子は手習ひをさせたり、歌の稽古をさせたりすることはあなたの所でなら十分に出来るだらうと思ふが、骨を折るだけで素質が無ければ困るね。そのうち本宅の娘と一所に裳著の式をさせようと思ふ。」こんな話を彼がしてゐるうちに日が暮れた。「時間を無駄にしないで院の御所へ伺候しよう。」と彼は云つて、また多くの従者を引連れて家を出て行つた。

天候が直り、日和續きになり、うらうらと晴れていかにも春らしく思はれるやうになつた。暖くもなく寒くもない風が梅の香と一所に動いて、鶯の音を誘ふかと思はれる頃であつた。その他の鳥の聲も和やかに聞えて來るのであつた。家の上の方を眺めて見ると、巢を作つてゐる雀が瓦の下を出たり入つたりして囀つてゐた。庭の草は水から解放されたと云ふ顔をしてゐるのであつた。閏の二月の一日には長閑かな春雨が降つてゐた。それからまた晴天になつた。三日は彼の方位の障りが除かれたと想像されるのであつたが何とも音信がない。四日も彼が來ないままで暮れたのを訝かしく思ひながら寢に就いて聞いてゐると、夜中頃に火事のあるらしい物音がした。近い所だと云ふやうであるが、氣を滅入らせた自分は起きも上らないで居る所へ見舞の人が誰れ彼れと來てくれた。徒歩で外出などをしない人までも車馬を用ひずに來てくれ

たりした。其の時は室の戸を叩かれたので自分も起きて行つて禮を述べたりした。もう鎮火したと云ふことで、さうした客達の皆歸つて行つた後に、また寢室へ入つた時に、先拂ひの聲を立てて來た一行がこの門前で立留つたやうな氣配を聞いた。不思議に思つてゐると、「殿様がお出でになりました。」と云ふ。だが消えてゐる室内が暗くなつてゐたから、「眞暗まっくらだね。息子を頼みにして安心をしてゐたのだね。火事がこの家に近いやうに思はれて私は出て來たのだが、是れで安心したからもう歸ることにしよう。」こんなことを云ひながらも彼も床に就いて、「今夜は宵のうちに此處へ來たく思つてゐたのだが、侍者達が皆歸つてしまつたから、出るにも出かねてゐたのだよ。昔の氣樂な身分であれば直ぐ馬にでも乗つて來るのだがね。何と云ふ窮窟きうくつな身の上なのだらう。思ふことを直ぐ實行に移すことの不可能な人間にされてしまつて、俄かに外出をするやうな口實でもなければと思ひながら寢たのだが、この近くに火災が起つたと云ふからこれはいい都合だと思つた。何だか自分の思ひが通じた氣がする。」などと彼は情のあるらしい事を云つてゐた。夜が全く明けてしまへば車も目立つからと彼は云つて薄暗うすくらいうちに歸つた。六日七日は彼の謹慎日になると云ふことであつた。八日は雨が降つた。夜まで續いてゐるので

石の上の春の苔がこの雨に踏みつけられてゐる氣がして可哀相であつた。十日に自分は加茂の社へ參詣した。そつと一所に伴れて行つて欲しいと望む少女の爲めに、其れがいいと思つて出かけることにしたのである。加茂は何時來ても珍しい氣のする所であるから、目に映るものが皆快い。新鮮な身になつたやうに思ふのも強ひて自ら思ひなしてゐるのだと人からは見えるかも知れない。この前のやうに歸りに北野を通つて行くと、澤の邊りに芹などを摘んでゐる少女もあつた。春になつたからと云つて餘りに氣早いことであると思ひ、衣服の裾が濡れるであらうと氣になつた。船岡あたりを廻つて見たのも面白かつた。暗くなつてから家に歸つて寢に就くと直ぐに門を大層に叩く音がする。はつと驚いて覺めて見ると彼が來たのであつた。善くない付度には、此處へ近い女の家へ行き、其處に差支へがあつて歸されての突然の來訪なのだらうともされるのであつたが、彼はそんな風も見せない。其れで自分は打解ける氣が朝までしなかつた。翌日彼は少し遅くなつてから出て行つた。そして五六日経つた。十六日は心細い氣のする雨が降つてゐた。次ぎの朝起きて見ると自分の寢てゐたうちに來た彼の手紙があつた。今日は方位が塞つてしまつたからどうしようかと思ふと云ふやうな内容のものであつた。返事を

書いて出して暫くすると、彼が自身で出て来た。もう日の暮近くになつてゐたから自分も妙な気がしないではなかつた。夜になつてから、「どうしたものだらう幣帛の使を出さうか、どうしようかな。」などと云つて、氣懸りな用を思ひ出した風が彼に見えるので、「ではお歸りなさい。此方にお泊りになる必要は御座いませんもの。」かう自分は彼に勧めて歸らせる事にした。出掛けようとする時に、「折角来たのだが今日は通つて来た夜の數にあなたはしないだらうね。」と彼はそつと云つた。そしてまた、「さう思はれては自分の志が通らないことになるから明日の夜は必ず來ることにしよう。」と云つたが、自分の危んだ通りにそれ以來訪ねてくれぬ日が八日九日程も重つて行つた。それを豫期して數に入れてくれるかとか何とか云つたのであらうと、自分は煩悶される餘りに、稀れなことであるが自分の方から次のやうな歌を送つた。

片時に代へし夜敷をかぞふれば鳴の諸羽もたゆしとぞ鳴く

返事は、

いかなれや鳴の羽がき數しらず思ふかひなき聲に鳴くらん

こんなのであつたから、促しがひもなく、來ようとするらしくもない彼を、どう云ふ理由があつてなのであらうと自分は思ひ惑つた。

自分がこんな氣持ちである間は庭の掃除もさせないでゐたから、櫻の花が餘りにも多く散り溜つて、海にでもなりさうに見えた。それは二十七日で雨は昨日の夕方から降つて、それから風が吹いて花を吹き拂つたのである。三月になつた。庭の木立が芽を出し初めたのを見ると加茂祭の頃が思はれ、柳の色も笛の聲も戀しく思はれるのであつたが、今日までまだ彼の音信がないことを考へると、自分の方から歌を送つたりした事が輕卒に思はれて、平生の絶間よりも心が苦しいのも自ら求めたのでは非もないことであらう。七日になつた。この日に彼から、「是れを仕立てて下さい。謹慎日が續いたので行くことが出来なかつた。」

こんな手紙を持たせた使が來た。例の彼の口吻であると思ふ自分は、冷淡に、「承知いたしました。」とだけ口で云はせた。正午頃から長閑な雨になつた。十日は御所から八幡祭の使が立つ

と云つて役人は皆繁忙を極めてゐるやうであつた。自分は親戚の家に祭へ出る息子があるのを訪ねる爲めにそつと出かけて、正午頃に歸つてくると丁度家の若い女房等が見物に車で出る所であつた。さう聞いて自分の乗つて歸つたのにも他の女房等を乗せて出してやつた。

翌日もまた祭の歸りの行列を見に出たいと云つて女房等は騒いでゐるが、自分は氣分が重くて横になつてゐて、見物などをやる心は少しも起らないのであつたが、ひどく勧められるまゝに檳榔毛びんろうげの車一臺に四人程で乗つて街へ出た。車は冷泉院の御門の北の方に留めて置いた。外の見物人は來ない所であるから靜かに行列も何も見ることが出来るのである。暫くして通る行列の中に子と甥が、一人は倍從ばいじゆ、一人は舞人になつて混つてゐた。變つたことは何もなくて日が経ち、十八日に清水寺へ參詣すると云ふ親戚の人達にまたそつと自分も混つて行つた。初夜の勤めが済んで外へ出ると十二時になつて居た。一所に行つた親戚の家へ寄つて食事などをしてゐる時に、召使が、「西北の方に火事の火が見えます。一寸縁側へ出て御覽なさいまし。」と自分に云つた。「遠い遠い。支那だらう。」などと家の人は戲談を云つてゐるが自分だけは何となく不安を感じてゐた。そのうちに督殿かくだいが焼けてゐるのだと云ふ聲が聞えて來た。自分の驚きは非

常なものであつた。督殿と自分の住居は塀一つが隔てになつてゐるだけであるからである。若い娘をさぞ驚かせたことであらう、どうかして早く歸りたいと思ふうちに、車の用意は出來た。夢中で歸つて來ると火事はもう済んでゐた。自分の家だけは残つて、火の出た家の人も皆自分の家に来て集つてゐた。家には五位がゐるために、逃げるのに土を踏ませるやうなこともせぬかと心配した女の子も車に乗せ、門をよく閉めさせて行届いた處置をしたので、後になつて恥ぢるやうなことは何もなかつた。男の子だけあつて落つて然るべき事は皆したので五位を嬉しくも思ひ、また自分の爲めにはこの外に力とする人はないのであると云ふ孤獨感も覺えた。隣から來てゐる人達は生命だけがやつと助けられたに過ぎず、他の物は皆失ひはてたと歎いてゐるが、そのうちすつかり鎮火してしまつた。時は経つが當然自分を見舞つてくれる筈の人からは何とも便りが無い。それ程に親しくもせぬ人の家からは次ぎ次ぎに慰問の人や使が來、唯だ火元が近いと云ふ疑ひを持つただけの人も急いで駈けつけてくれるのであつた。それであるのに、それであるのに彼からの音問だけは受けられない。この愁ひを共に抱いてゐる子は、さすがに雑色とか侍とか彼方の家から來た者へ、彼に傳へさすべく今日の混亂した家のこ

とを語り聞かせたやうであるのに、何たることであらうと自分の心が彼への反感で満たされてゐる時に門が叩かれた。人が見て、「殿様がお出でになりました。」と云つて來たので少し心が落ちついた。彼が、「此方へ駆けつけた侍達の報告を聞いて驚いたのだよ。濟まなかつたよ、直ぐに來なかつたことが。」こんなことを云つてゐるうちに鶏の聲もする時間になつたから寢に就いた。そんな爲めに長閑かな風に見える朝寢をして起きた。今朝になつてもまだ見舞ひの人が大勢來るために、ますますうるさくなつて行くであらうからと云つて彼は起きて直ぐに歸つた。暫くして男達の衣服を數多く彼から送つて來た。物の撰擇はせず今手許にあるのを送ると云ふことであつた。手傳ひに來てくれた人人へ出すやうにと云ふ折詰の料理なども送られたのであつたが自分はよく見なかつた。隣家の火事について占ひをさせると、三人程の病人が出ること、人から恨まれることなどを云つた。この家へ來てゐる親戚の人達は南の方角の塞がる年であつたから長くは居られぬことと思はれた。そしてその人達は二十五日に地方官の父の所へ皆行つてしまつた。此處に居ても不自由はない筈なのであるが、自分が何時も憂鬱な風にしてゐるのが、見てゐづらかつたのではあるまいか。こんな自分であるから命などは少しも惜しくはない

のに猶謹慎の印し紙が所所の柱に押し附けられてゐるのは、命が惜しい心らしく見えて、自ら見苦しく思はれた。この二十五日に謹慎の終ることになつてゐたその夜、門を叩く音がしたので、中からは重い謹慎日が今日で終ることになつてゐることを云つて、彼の來訪を斷つた。それで彼は愛人の家のあるらしい方角へ行つたけはひを遠く自分は聞いた。翌日來た彼は方位の塞がることを云ひ、晝になつて中食の用意の出來たのを告げられた頃に歸つて行つた。それからまた彼は例のやうに謹慎日の障りとか何とかを口實にして來ない日が經つて行つた。自分も謹慎日がちに暮すうちに四月の十幾日になつた。世間は加茂祭が近づくことと云つて騒いでゐた。或人から誘はれたので、最初の齋院の御禊の日から自分は見物に出たが、幣帛を捧げたいと思つて社へ行くと、其處へ一條の太政大臣が參詣された。華麗を極めた一行であつたことは云ふまでもない。下車して歩いてお行きになる大臣が彼によく似ておいでになることを自分は思つた。彼の外出の場合の華やかさも是れに多く劣るものでないのであらう。それを、「御立派な御身分で。」何と云ふ幸運のある方でせう。」などと人が云つてゐるのを聞く自分の心は寂しかつた。彼と自分の懸隔の甚しいことが思はれたのである。さう云ふ氣持を知らない同行者に次

ぎの日も誘はれて知恩院の邊りへ見物に出たが、五位も別の車で従つて來たのであつて、見物車の一樣に歸途に就く時に、非常に感じのよい車が五位の車の前を行つた。後れないやうに其の後を五位は附けて行つたのであつたが、其の車は家を見せまいとして途中で横へ逸れて紛れてしまふとしたのを、五位は巧みに後をつけて行つて家を見届けて來た。次の日に五位は、

思ひその物をこそ思へ今日よりはあふひ遙かになりやしぬらん

こんな歌を送つたさうである。彼方では何のことか解らぬと云ふやうな挨拶をしたらしい。それにも關らずまた、

わりなくも杉立ちにける心かな三輪の山もとたづね初めて

と云つてやつた。大和守の家なのであらう。

下ノ中

さうして三十日になつたが、杜鵑でない彼は卯の花が咲いても姿を見せない。二十八日の神前のお供物の下しを願つて遣した使に、少し加減が悪くてと云ふやうな手紙を持たせて來たのであつた。五月になつた。菖蒲の根の長いのを捜し集めようと家の若い女達が騒いでゐる時、自分も徒然な餘りに絲で其れを繋いだりした。そして是れを家の娘と同じ年頃の彼の本宅の娘に遣るが善いと云つて、

隠れ沼ぬまに生ひ初めにけるあやめ草知る人なしに深き根ざしを

この歌を中へ結び付け、五位が父の所へ行くのに托した。返事に、

蒲草根にあらはるる今日こそはいつかと待ちしかひもありけれ

五位はもう一つ贈物の菖蒲の根を撰んで戀人の所へ、

わが袖は引くと濡らしつあやめ草人の袂にかけて乾かせ

と云ふ歌を附けて送つた。

引きつらん袂は知らずあやめ草あやなき袖にかけずもあらなん

こんな返事が来たのであつた。六日の早朝から雨になつて三四日續いて降つた。加茂川が出水して人が流れたと云ふやうな噂も聞いた。さうした一般的事からも、自分一人の事からも物思ひばかりが續けられるのであつたが、もう自分は馴れてしまつてさう悲んではばかりは居ないやうになつた。何時か石山で知り合ひになつた僧の所から「奥様の爲めに御祈禱をしてゐます。」と云つて遣したが、返事に、

「もう不幸の底にゐる自分は佛様でもどうなされやうもないでせう。ですから息子に人並なよい幸福があるやうにとだけ祈つて下さい。」

と書いてゐるうちに涙が留度なく流れるのであつた。十日になつた。この日は彼から五位にことづてた手紙を得た。

「氣分の勝れない日ばかりなので、随分長く行かぬが變りはありませんか。」

などと書かれてあつた。返事は翌日また父の邸へ行く五位に托した。

「昨日直ぐにお返事を差し上げたかと思つたのですが、この使以外には交通の便もなくなりましたやうな氣がしてゐるものですから遅れて失禮で御座いました。どうかとお尋ね下さいましたも、在りのままを申し上げました所で好意に解釋はして下さらない事は申し上げないでもいいと思ひ、よそ行きの御挨拶だけをすれば宜しいのだと氣樂に思はれるやうになりました。(眞葛原風だに寒く吹きこすはかへらぬ人をうしといはまし)人もかうした厭な歌を詠んで居りますわ。」

と書いたのであつた。「人に誘はれて加茂の泉と云ふ所へお出かけになりましたので、お返事

も伺はない儘で歸りました。「歸宅した五位は云つてゐた。「それは華やかなお遊びだね。」と心にもないことを自分は云つてゐた。此頃の空には始終雨雲が動いてゐて農夫達の裾も濡れがちであらうと氣になる天氣が続いた。杜鵑がよく啼くやうである。物思ひのある人は安眠の出來ないものであると云ふが自分は此頃よく眠れるせいか他の人人が「この間夜中にも聞きましたし夜明にも啼きましたよ。」などと云つてゐるのを聞くと、然かもその中で自分だけがまだえ聞かずにゐると云ふのが恥しいので、何も云はずにゐるが、心の中で、

我れぞげに解けて寝らめや杜鵑物思ひまさる聲となるらん

こんな歌が詠まれた。かうして徒然のうちに五月から六月になつた。東向きの居間は朝日の射した後の熱が溜つてゐるので、南の縁附きの座敷へ出たが、近い所に娘がゐるために、音を立てず靜かに横向きに寝てゐると、庭に鳴く蟬の聲が夥しく聞えて來た。物の音色に敏感でもない老下男が一人庭を掃かうとして帚を持つて木の下に立つてゐるが、急に鳴きちぢる聲に驚いて上を向きながら、「宵ぞ宵ぞと云つてゐるぢやあないか。蟬が來たのだから考へて見るとも

うその時節になつてゐるらしな。蟲でもよく知つてゐるものだ。」こんな獨言を云ふのと同時に老人の云つたが如く宵ぞ、宵ぞと蟬は鳴き立てた。可笑しくも哀れにも思ふのであつたが、眞實の心の庭はあぢきなさで満たされてゐた。五位は楓^{もみぢ}の枝の紅い葉の附いたのへ次の歌を附けてあの車にゐる女の所へ次の歌を送つたのであつた。

夏山の木の下露の深ければかつぞ歎きの色燃えにける

返事、

露にのみ色もえぬれば言の葉を幾しほとかは知るべかるらん

こんなことで暮れた日の宵になつて、珍しく情味のある手紙が彼から來た。また二十幾日に稀れな彼の來訪があつた。かうした彼に馴れてしまつた自分は、不快さも表に見せず絶間はなくてあの日からこの日に續いてゐるやうに彼をもてなしてゐる事も、悲歎し切つた心がさせることであらうと、その中でも自分は思つて悲しかつた。然かも彼は以前よりも時間を急いで

歸つた。この頃地方廻りをしてゐる父の家は無くなつてゐて、自分の家へ同居してゐるのであつたから、その多人數の目が自分を見て何と思ふであらうと思ふ程にも彼からの音信がないであつた。

七月の十四日になつて客が皆歸つてしまふと徒然になり、干蘭盆の用意などを女房等にさせてゐるが、ともすれば女房等に吐息をつく風の見えるのが哀れでもあり不快でもあつた。盆の三日目に例年のやうに佛への供物を調べて、彼の本宅の執事の送り状が添つて持参された。こんな何時までも昔を忘れずには居る人であるのにと、自分は誰れにも何とも云はなかつたが心では思つてゐた。同じ状態で八月になつた。一日は朝から雨であつた。時雨風になつて來てそれから午後二時頃には晴れたかと思ふとつくつくほふしが喧擾しい程に鳴くのを聞いても、「かしかまし野もせにすだく蟲の音のわれだに物は云はでこそあれ」と云ひたい氣がするのであつた。どう云ふ理由なのか涙がよく出て來る日なのである。來月死ぬであらうと云ふ物の示しもあつたのであるから、死が近づいたせいで、こんな風かぜに氣が弱つたのであらうと思ふ。相撲の濟んだ後の宴會が彼の邸であると云ふやうな事も餘所事に聞いてゐる自分であつた。十一

日に彼が來て、「思ひがけない夢を見た。」と云つて、例の嘘らしく思はれる事も多く語られるのであつたが、自分は魂も半分消えたやうになつてゐて何も云はれないでゐると、「何故物を云はないのですか。」と彼は詰つた。「何ももう云ふことは御座いません、私など。」と答へると、「何故來ない。訪ねてくれない。憎い。恨めしいと云つて、打つなり、つねるなりしたらいいぢやないの。」かう彼が云ふので、「私の云ふべきことは皆云つて下すつたのですから、その外に申す必要は御座いませんわ。」と自分は云つた。翌朝になつて、「今度の用事を濟ませたらまた來ます。」と云つて彼は歸つた。十七日にその宴會はあつたと云ふ事であつた。三十日にもなつたのであるから、約束した用事も濟ませてと云ふ日は疾くに過ぎた筈だと思ふが、もう自分は何とも思はなかつた。警戒せねばならぬ生命の危険な日と云ふのが近づいて來ることだけを寂しく身に沁んで思ふ日を送つた。五位は例の所へ手紙を送るのであつた。今まで來た返事は皆その人自身が書いたものでないらしい事を恨めしく思ふ意味を云ひ、

夕されの闇のつまづま眺むれば手づからのみぞ蜘蛛もかきぬる

この歌を添へたのであるが、先方ではどんな気がしたのか、白紙へ何かの尖で書いた次のやうな返歌を遣した。

蜘蛛のかくいとぞ怪しき風吹けば空に亂るる物と知る知る

また此方から、

露にてもいのちかけたる蜘蛛のいに荒き風をば誰れか防がん

と云つてやつたが、もう今日は暗くなつてしまひましたからと云つて返事はくれなかつた。五位はまた翌日、昨日の白紙の歌を思つてか、

たじまのや焚く火の跡を今日見れば雪の白濱白くては見じ

と書いて遣つたが、「一寸外へ行つて居りますから」と云つて返事をして來なかつた。翌日になつて、「お歸りでしたら昨日のお返事を頂きたい。」と言葉で云つてやると、「昨日のお歌は餘り

に古めかしい事をお云ひになつたので、お返事は出來ません。」と、それも言葉で返事をして來た。また翌日、

「古めかしいとお云ひになつたのは御もつともです。

ことわりや云はで歎きし年月も古の社の神さびにけん」

と云ふ文を送つたが、其の日は家は謹慎日であるからと云つて返事を出さなかつた。その次の日にまた、

夢ばかり見てしばかりに惑ひつつあくろぞ遅き天の戸ざしは

と五位は書いて送つたが、今度も何とか云ひ紛らして返事をしない。また、

さもこそは葛城山に馴れたらめ唯だ一言や限りなりける

と五位は云ひやつた。誰れが教へたのでもなく若い人はこんな歌を異性へ送ることに一所懸

命であつた。自分は春の夜も徒然な秋の夜も唯だ物思ひばかりをしてゐるよりは、死んだ後に子が見て自分を忍ぶ便りにと思つて此頃は繪をいろいろと描いてゐた。今死ぬか、今日死ぬかと思つた命は漸く月が経ち、日も普通に經つて行くのを見て、だから初めから思つてゐたのである、どんなに願つてゐても自分に死の運命は廻つて來ないのであらう、幸福な人と云ふものは命が短いものなのであらうと、こんな事を思ふうちに九月も濟んでしまつた。二十七八日に土の忌があつて外へ行つてゐる時に、珍しく彼が來たことを家から報じて來たが、そんな事にもう關心を持たない自分であつたから、「さう」と云つただけであつた。

十幾日にあの西山の寺へ紅葉も見がてらに出掛けようと親戚の者が誘ふのに任せて行つた。この日も時雨が降つたり、晴れたりする日であつたが、紅葉は非常に美しくかつた。十一月の一日に一條の太政大臣がお薨れになつたと云ふ話が傳つて來た。誰れもさうした場合に思ふやうに、眞實に悲しい事であるなどと自分も云つてゐる夜に初雪が降り七八寸も積つた。「まああやくな雪になつて、御息方がこの道をお徒歩で葬場へお出でになるかと思ふと傷ましい。」と閑暇な自分はそんなことばかりを思ふのであつたが、官邊ではこの事から大官の移動があつ

て俄かに幸せを得たと云はれる人の家も多いやうであつた。十二月の二十日過ぎに彼は來た。年が押しつまとまた毎年同じ事を忙しくして迎へた春も三四日になるが彼の音信はなく、新しい年と云ふ喜びも自分には感ぜられない。鶯だけがもう鳴いて來たのを身の沁む思ひで自分は聞いた。五日かに晝間一寸彼が來て、また十幾日とそれから二十日頃に誰れも寢てしまつた夜更けに來て、この日は少しく變調であると思はれた。春の除目があると云つて彼はまた忙しさの口實にした。二月になつた。紅梅が例よりもこの春は美しい色に咲いた。自分だけは敏感にさう思つてゐるのであるが、他の人は別段何とも思はぬらしい。五位がその枝を折つて例の戀人の所へ贈つた。

かひなくて年經にけりと眺むれば袂も花の色にこそしめ

返事には、

年を経てなどかあやなく空にしも花のあたりを立ちこそめけん

かうあつた。唯だ表面的な求婚者への挨拶と見えた。二月の三日の晝頃に彼が来た。「もう年が行つて通つて來たりする事が恥しく思はれてね、世間へ遠慮もされるのだが、逢ひに來たいのだから仕方がない。」こんなことも云つた後で、「今夜は方角が塞つてゐるから。」と云ひ、歸らうとする彼は、自分の染めた物ではないが、匂ふ程にも見える櫻重ねの綾の、模様は外へも零れる程派手に附いた物へ、固紋織（模様の所が低くなつた厚織物）の袴のつやつやとしたのを著けて、先拂ひの聲を華やかに立てさせて歸つて行つた後で、自分は餘りに無頓著な姿であるものであると思つて眺めて見ると、著てゐる物は著古るされて衣紋も崩れてゐ、鏡を見ると醜い顔が寫る。またも今日見た自分に彼が飽いてしまふのでないかと頻りに不安が起つて來た。こんな物思ひをする間はずつと續いて春雨は降つてゐたから歎きの芽も萌えて行くと思はれた。五日の夜中に人の云ふのを聞くと、以前火事のあつた彼の愛人の家が今度また全焼してしまつたと云ふのである。十日頃にまた晝頃彼が來て、「春日詣りの旅をするから、その間逢はれないと思つて。」と云ふのが常に變つたことのやうに思はれた。十五日に院の小弓の競技會があると云ふことであつた。前と後に分けて服裝を變へると云ふことであつて、彼は五位を通じて仕度

のことを自分にも分擔させた。當日になつて今年に殊に高官が多く出席して華華しい勝負になると云はれた。小弓は彼が今迄本氣にしてすることもなく軽く侮つてゐたから結果はどうなるかと思つてゐると、彼は初めの時に二本の矢を放ち、その後の多數の人の勝負の時に彼は勝つたと云ふ善い話を人がした。それから二三日して五位が、「最初の二つの矢の時の後の方のは惜しかつた。」などと云つた。自分も無論その事は残念に思つた。

年中行事の八幡の祭がこの時分にあつた。徒然であるからと思つて、自分はそつと車に乗つて町で見物をしてゐると、殊に華やかに先追ひの聲をさせて來る一行があつた。誰れなのであらうと眺めてゐると、前驅をしてゐる人の中には彼に従つて自分の所へ來る人もゐた。彼なのであると氣が附いた時に殊更自分がみじめに思はれた。簾を巻き上げて、垂幕の裾は左右へ疊み寄せられてあつたからよく彼が見えるのである。自分の車が目に附いた時に、彼は扇で顔を隠して通つた。其の日に彼から來た手紙へ書いた返事の端に、

「昨日は非常に華やかな御様子でお出ましになつたと申すではありませんか。なぜ全部を私にも見せて下さらなかつたのでせう。若若しいなされ方。」

と書いてやると、またその返事に、

「それは老いの恥しさからでせう。華やかだと云つた人は憎い人に思はれる。」

などと書いて来た。また其れ切り十日餘りも便りが無い。是れを今までの絶間より長い氣がするの、また自分の心がどうなつたのかと思はれた。五位は例の所へ手紙を書いてゐた。然るべき機會もなかつたし、まだずつと以前には男の子のまだ幼稚なことばかりをその家の人には云つてゐたものであつたから、今度の問題に就いて初めて次のやうな歌を自分から添へてやつた。

水隠れの程と云ふとも菖蒲草なほ下刈らん思ひ合ふやと

来た返事は低級な氣のするものであつた。

した刈らん程をも知らずまこも草世に生ひそはじ人は寄るとも

彼はまた二十幾日に来た。そして二三日するとまた近い所に晝火事が起つた。驚いて皆がこ

たごとと騒いでゐる時にもう彼は来た。風が吹いてゐて火が次へ次へと移つた爲めに六時過ぎにもなつた。「何時まで居ても同じことだらうから。」と云つて彼は歸つて行くのであつた。彼がこの家に来てゐる事を知つて、「自分が參つた事を申し上げて置いてくれ。」と云つて相當な人達が云ひ残して行つた事を、侍達が嬉しさうに話してゐたと後で女房等の云ふのを聞くと、召使達はこの家の女主人は稀にしか良人を迎へ得ないことを知つてゐて、彼の交遊の大官連中が来たことを無上の喜びとするのであらうと思はれた。またも三十日に火事があつた。彼は入つて來ると直ぐに、「火事の近くにある晩は賑はしくて好い。」と云ふのであつた。(衛士の焚く火の夜は燃えて云々)であるから自分の胸の火は何時の夜も燃えてゐると云ひたかつた。五月の朔日になつて五位が例の娘に送つた歌。

打ちつけて今日だに聞かんほととぎす忍びもあへぬ時は來にけり

返事、

ほととぎす隠れなき音を聞かせてはかけ離れたる身とやなるらん

五日にまた、

物思ふに年経けりとしてあやめ草今日をたびたび過ぐしてぞ見る

返事は、

積りける年のあやめも思ほえず今日も過ぎぬる心見ゆれば

とあつた。どんな風^{かぜ}に恨みを云つたのであらうとこの歌が可笑しく思はれた。彼に對してする煩悶はこの月もまた時時同じ程度に起つた。二十日頃に遠方へ行く人に餞別にやりたいからこの食品入れの袋の中へもう一つ一重の袋を作つてほしいと彼から云つて來たので、自分が其れを作つて居る時に彼自身が來た。「歌を一つだけ作つて袋の中へ入れて欲しい。自分は此頃氣分が餘りよくないから歌が出來ない。」と云ふから、可笑しくなつて、「さう致しませう、で大き

な方の袋の中へ入ります物の名を取つて、歌を作りたく思ひますから、一つでも抜けて居ては面白くないもの、入る物を皆見せて下さい。」と自分は云つた。二日程して彼から、身體は悪いが、餘り長くなつては面白くないと思つて、一重袋と云ふ言葉を取つてかう云ふ歌を作つて贈つた、返しの歌はかうであつたなどと手紙に長く書いて、自分のと何方が善いか、あなたに公平な批評を頼むなども云つてあつた。この日は雨氣の催してゐる日で、何となくしんみりと彼の氣持ちが受入れられる心になつてゐた。書いて來た二つの歌の優劣の區別は自分につくが賢がつて評を書いてやるよりはと思ひ、自分は次の歌を其れに代へた。

うらとのみ風の心を寄すめれば返しは吹くも劣るらんかし

六月七月も例の月と同じ程な彼の通ひ振りであつた。七月の二十八日に、「相撲に就いての會議で今まで御所にゐたが、此方へ來ようと思つて急いで退出して來た。」と云つて出て來た彼が其儘八月二十幾日まで來ないのであつた。噂に聞くとあの以前の愛人の所へ度度通つて行くこと云ふことであつた。もう彼の心は自分からその人へ移つてしまつたのだと思つた。こんな風な

物思ひで半分病氣のやうになつてゐる頃、一方では邸宅がますます荒廢して行くし、廣い所に少い人數が住んでゐる不用心さもあつたため、是れを人に譲つて父は自身の家へ自分を移らせようと定めた。今日か明日かに廣幡と中川の間くらゐの場所にある家へ移ることになつた。さうなるであらうと云ふことは以前から彼に仄めかして置いた事であるが、いよいよ移ることになつたこの場合に無斷で決行するのは悪いと思ひ、「御相談をしたい事があります。」と云つてやつた所、彼は肯ぜずに謹慎日になるからと冷淡な返事をして來た。それでは構はないと自分は思ふやうになつてその儘引越してしまつた。もう山の近く見える町の端で、向ひは河原になつてゐる邸であつたから、感傷的な心にもなつてゐる時であつたし、物悲しい住居を作ることになつたと思はれた。かうして二三日経つが彼は知つた風もない。五六日してから、移つたさうであるが、何故その時に知らせてくれなかつたかだけは云つて來た。返事に、

「其れを申し上げたいと思ひましたし、また不便な所へ参りましてはお出で下さることはなからうと思はれもしまして、ともかくもあなたが時時訪ねて下さいました記念の家でもう一度御一所にお話もしたいと私は願つてゐました。」

と自分は彼の此處への訪問は諦めて居るやうに書いてやつた。「あなたの云ふ通りに其處は行くことが容易でないから。」と、かう云つて彼は跡を絶つてしまつた。

九月になつて朝早く揚戸を上げて眺めると、邸の中にも外にも川霧が立ち籠めて、向うの方には麓の方の切れた山の頂だけが並んで見えた。非常に悲しくなつて、

流れての床と頼みて來しかども我が中川はあせにけらしも

こんな歌が詠まれた。東の門の外に田が刈られて、稲は丸太に掛け渡されてあつた。こんな家へも稀れに訪ねて來てくれる客の爲めには青い稻を刈らせて馬に與へ、供の人へは燒米を作つて出させることに自分はしてゐるのであつた。小鷹を飼つてゐる息子があつたから、鷹は外の田へ出て遊んだ。例の女の所へ五位は次の歌を送つた。

さごろものつまもむすばぬ玉の緒の絶えみ絶えずみ世をやつくさん

この返事は無かつた。また日が経つてから、

露深き袖に冷えつつ明かすかな誰れ長き夜のかたきなるらん

この時には返事があつたが、つまらぬものであつたから書かずに置く。もう九月も二十幾日になつたのであるが全然彼は來ない。それに呆れさせられるのは、是れを縫はせてくれと云ふ冬の仕立物が届けられたことである。「お手紙も入つてゐたのですが落してしまいました。」と使は云ふ。「さう云へばあなたの失策になるから、此方から返事を出さなかつたことにしよう。」かう使に云つたことで、何を彼が書いて來たかは知らずに終つた。仕立物だけは拵へて手紙は添へずに届けてやつた。其れ切りで何の音信もなくて、年末になつた。三十日にまた、「是れを善く直して下さい。」とだけ使に云はせ、もう手紙も添へずに下襲ねの仕立替へを彼は命じて來た。どうしようかと自分は手を附けるのに躊躇して家族に相談をすると、「もう一度今度だけは試みにして上げる方がいい。彼方の用を嫌つてゐるやうに見せないため、その方がいいと思ふ。」かう云はれて、其儘手許へ置き、美しく仕立替へて元日に五位の行く時に持たせてやつた所、「綺麗になつたとお父様はお云ひになりましたよ。」とだけの報告を五位が歸つて來てした。恨

めしいとも何とも云ひやうのない彼である。前年の十一月に地方官の兄の所に産があつたのを其儘手紙も送らずに過ぐして來たのは、どうした自分であらう。せめて正月にでも祝ひを兼ねて使を出さうと思つたのであつたが、大層な祝品などは贈ることが出來ないし、また言葉だけをいろいろ誇張して祝意を述べることも通俗的で厭であつたから、自分は白い小兒の衣服の包みを梅の枝に附けて、

冬ごもり雪にまどひしをり過ぎて今日ぞ垣根の梅をたづぬる

この歌も添へ、帯刀の長某を使にして、夜になつてから兄の家へやつた。その使は翌朝歸つて來た。薄色の桂一襲を纏頭に貰つて來た。

枝若み雪間に咲ける初花はいかにとふに匂ひますかな

これが兄の返歌であつた。そんなうちに初精進の日も過ぎた。そつと參詣に出ようと前から自分を誘つてゐてくれた兄弟があつて、何でも構はない氣になつてゐる自分は同行してその社

へ行つた。大衆の中にも誰れだと解るわけではないのであるが、自分一人は晴れがましくてきまりの悪い思ひをしてゐた。被ひをする所には垂氷つらひが澤山下つてゐた。面白く思つて其れに眺め入つてゐる時、大人でありながら童男の姿をして、髪を束ねて垂れた者の行くのに氣が附いた。目を留めて見ると、つららの氷を下の單衣の袖に包んで持ち、それを食べながら歩いてゐるのであつた。何の理由のある事かと思つてゐるうちに、自分と一所に行つた人が、その男に物を云ひかけた。さうすると氷を口の中に含んだままの聲で、「私に仰つしやるのですか。」と云ふ。その物の云ひ振りで身分の無い者と云ふことが解つた。「これを食はない人は願ひ事が成就しないですよ。」と云ふ。「幸福になる筈の人の袖が穢なく濡れて行くではないか。」と自分は心で思ひながら、

我が袖の氷は春も知らなくに心とけても人の行くかな

こんな歌も思はれた。歸つて來て三日程して自分は加茂の社へ參つた。雪混りの風がひどくて世界が暗く見えるやうな日で苦しかつたが、その時から風邪を引きずつと病氣をしてゐるう

ちに十一月にもなり師走にもなつた。正月の十五日には厄拂の火が焚かれるのであつた。五位附きの雑色の男がその役をすると云つてゐたが、侍達は皆酒の酔が出たのか聲高になつて、誰かが「靜かに、靜かに。」と制してゐるのも聞えた。自分は平生と違つた空氣を覺えて、縁側の方へ出て見ると月が美しく上つてゐた。東の方を望むと山が霞んで仄かに連つたのが凄く見える。柱に倚つて自分は今日までのいろいろなことを心に思ひ浮べ考へて見ると、彼は八月以來來ないで、もう正月になつたではないかと云ふことが思はれて涙が留度もなく零れる。

もろ聲になくべきものを驚はむつきともまだ知らずやあるらん

と歌はれた。二十五日になつて五位が急に嚴しい勤行を初めた。何の爲めかと思つてゐると其れは除目の日が迫つたからであつて、珍しく來た彼の手紙には、五位は右馬頭うまのかみに決つたと書いてあつた。五位は彼方此方へ禮廻りに歩くのであつたが、右馬頭は父方の叔父に當る人でもあつたから、其處へも挨拶に出た。先方でも非常に喜んでいろいろと話した後で、「あなたの所に居られる妹さんはどうしてゐられますか。幾つですか年は。」と問ふたさうである。歸つて

来て助がその話をしたが自分は無關心に聞いてゐた。結婚談などはまだ起されるのに早過ぎるからである。

その時分に院の御所で弓の競技會があると云つて皆騒いでゐた。右馬頭も助も同じ組の方へ出るのであつたから、その事毎日のやうに競技の爲めの假の廳舎で出合ふことになり、頭の方はいつも助の妹のことばかり聞いてゐると云つて、「どんな積りなのでせう。」などと助は語つてゐた。二月の七日に自分は突然夢のやうに平河とか云ふ地へ出掛けた。大して深くない山と云つてよい所なのである。野が焼かれる頃で、今年は櫻の遅い年であつたから、熱きの多い路ではあるが花はまだ咲いてゐなかつた。山は奥へ行く程鳥の聲もしないものであるから驚さへも啼かない。水だけが豊富に湧き返つて流れてゐた。路の苦しさにやつとやつと歩いて行く人と自分は人から見られてゐたことであらう。自分を持て餘してゐることはこの山路の苦難に於てばかりではないと思ひながら入相の鐘の鳴る頃に寺へ到り著いた。御燈を上げる手続きをして、人のするやうに御堂で起居するのが苦しかつた。そのうち夜が明けて行くらしくてそして雨になつた。困つた事と思ひながら一行は僧坊の方へ下りて、「どうしたものか。」などと云ひ合

ふのであつたが、もうすっかり明るくなつてゐた。簀とか笠とか云つて誰れもその用意をさせるのに夢中になつて騒いでゐるが、自分だけは靜かな景色を眺めてゐた。前の溪間から雲がしづしづと昇るのを見ると非常に悲しくなつて、

思ひきや天つ空なるあま雲を袖して分くる山踏まんとは

と思つた。劇しい降りになつてゐるが、其儘居るわけにも行かず、少しの晴間を見つけて僧坊を出た。一所に来てゐる娘を見ると一層自分の苦痛の増る氣がした。そしてやつと京の家へ歸つたのであるが、その翌日競技の假廳舎から夜更けて出て、宿泊させて貰つた所から歸つて來た助が、「お父様がお役所の長官が去年から熱心に相談を持ちかけてくることがあるのだが、お前の所に居る子はどんなになつてゐる。大きくなつてゐるか。一人並の女になつたらしく見えるかね。」と云つていらつしやいましたが、頭も右大將からあなたに何かお云ひにならなかつたかとお問ひになるものですから、お話がありましたと云ふと、明後日は吉日だから初めの手紙を上げたいと思ふとお云ひになりました。」と自分に云つた。まだ結婚の事などは念頭にも置

いてゐないのにと心に思ひながらその晩は寝た。頭が云つたと云ふ日になつて手紙が来た。返事が一寸出来にくいやうなものであつた。内容は、

「以前から私の希望してゐることが有りまして、右大将へ人づてにお願い致しました所、其方の話だけは解つたが彼方へ直接にお話して見るやうにと仰せになつたと其の人は私へ云つてくれました。然し僭越なことを願ふ男であるとあなたに不快に思召さないかとそのまま御遠慮をしてゐました。またよい機会も得られなかつたのですが、叙目の發展を見まして、御子息が自分の所の助におなりになつたのを承知しまして、今後はお宅を御訪問しまして、他から妙に思はれることもなからうと思ふやうになりました。」

などと道理らしく書いて、奥に、

「武藏と云ふ女房さんの所へ先づ参ることをお許し下さい。」

とある。「返事をしなければならぬけれど、この事に就いてどう云ふお考へがあるのですかとお父様へ一度御相談をしてからにしなければならぬ。」と自分が云ふと、「謹慎日だとか何だとかで差支へばかりが多くて、手紙でも直ぐにお目に懸けるやうなことは出来ません。」と云つ

て助は立つて行つた。そして五六日経つた爲めに、先方は氣がかりに思つたのか、助の所へ、「是非逢つてお話をしなければならぬ用がありますから来て下さい。」と云ふ使が来た。丁度雨が降つてゐて助が可哀相に思はれたが出てやうとする時に、また使が来たと云つて助が受取つた手紙を持つて来た。其れは紅の薄うす様にかかれた文で紅梅の枝に結び附いてあつた。

「石いその上と云ふことは御存じでせう。(いそのかみふりにし戀の神さびてたるに我れはいぞねかねつる)

春雨に濡れたる花の枝よりも人知れぬ身の袖ぞわりなき

愛する友人よ、愛する友人よ、私の所へ是非来て下さい。」

と云ふやうなことが書かれてあつた。愛する友人と書いた上の字は何であつたのか消してあつた。助は、「どうしたものでせう。」と云ふ。「面倒だね。使には途中で逢つたのでお手紙はまだ見てゐないと云つて逢つていらつしやい。」と自分は云つて、助を促して出した。歸つて来て、「何故お母様から返事をして下さらないのか。お父様へ御相談をしてと仰つしやる間にでも、

少しくらゐるのことは書いて遣して下すつてもいい筈だのにと恨みを云ふのですよ。」と助は語つた。二三日後にやつと助は父に頭の手紙を見せることが出来たのださうである。「そんな事に自分は同意をしたのでも何でも無い。そのうちに考へて置く」と云つただけなのだから、いい加減な挨拶をして置けばいいのだよ。今からもう訪ねて行くと云ふやうなことを云ふが、其れはさせて宜しくない。自分の娘がお前の家に居ると云ふ事は、まだ一般の人に知られてない事なのだから、誰れよりも人はお母さんに疑ひの目を向けたりする事になるから、とお云ひになりました。」と云ふ助の言葉を聞いてゐて自分は腹立たしくさへなつた。人が疑ふと云ふがその人と云ふのは彼以外の何者でもないであらうと思はれたからである。自分は右馬頭の返事をその日書いた。

「意外なお手紙のことは皆叙目のお蔭によりますことと存じまして、早速お返事を差し出したく思つたのですが、右大將から申されたとお座いましたことによりまして、彼方へ聞き合せますうちに、まるで外國にゐる人に相談をします程の時間を要しました。然かも彼方からの返事が不得要領なもので御座いましたため、お氣の毒だと申し上げる外に何も御座いません。」

その端へ、

「女房の部屋を訪ねると仰せになりましたその武藏と申す者は、無暗に交際好きでありました過去を唯今戒めて居ります。」

とも書いた。頭からは同じやうな手紙が何度か来た。返事をその度毎にしようとしなさい此方の態度に對して憚る風が見えるやうになつた。

三月になつた。頭は女房の手からも自分を説かせようとした事があつて、その女が頭から来た手紙を見せに来た。「奥様がはぐらかせたやうなことをお云ひになるものですから恨めしがつてお出でになります。殿様はこんな云つてお出でになるのださうで御座います。」と云つて女房の取り出した手紙を見ると、其方で撰んだ月日は宜しくない。來月がいいだらうとお云ひになつて、中へ立つ人の目の前で曆を取り寄せて御覽になつたさうですよ、と云ふやうなことが書いてあつた。「變な早合點の書かれた曆らしいね。そんな筈はないのだから、中に立つ人が嘘を云つたのでせうと云つてお遣り。」と自分は云つた。七日か八日の正午頃に右馬頭の來た事を女房が云つて來た。「靜かにおし、私が家に居ないとお云ひ、相談をしよう」と云ふのだらうけれど

今からそんなことをする必要はない。」などと云つてゐるうちに座敷に近い庭の一所へ頭が現れて佇んでゐる影が見えた。平生から美男である頭が殊更今日は美しく顔を作り、柔い直衣に太刀を佩いてゐる、かうした姿は普通の事であるが、朱色の扇を手に持ち、少し急な風に冠の纒を吹かせて立つてゐる優美さは繪に描いた男のやうに見えた。美貌の貴公子が來てゐると云つて、女房達は裳なども掛けぬ姿で御簾の所へ集つて見て居る時に、丁度一陣の風が簾を外へ上げ、また中へ吹き込んだ。簾で隠れおぼせた氣になつてゐた女達はたまごつきにまごついて、簾の裾を押へて歩くのであつたから、家の中の人のだらしなさは頭の窺ひ見る所になつたであらうと女達が可哀相であつた。これは昨夜例の競技の假舎から深更に歸つて來て、助の寢坊をしてゐるのを起させにやつてゐた間のことで、やつと助が起きて來て、この座敷の方には誰れも居ないと云ふやうに云つてゐた。その少し前に烈風が揚戸を皆下して、初めから閉めてあつた座敷のやうになつてゐたから何とでも云へるのである。頭は是非上らせてくれと云つて、縁へ上り、「今日は吉日なのですよ。敷物を貸して下さい。そして最初の訪問をした印しにさせて下さい。」などとだけ云つて、「どうして誠意が認められないのだらう。」と歎息をして見せただけ

で歸つた。一日ほどしてから、言葉だけで、「留守中に御訪問を下すつて失禮を致しました。」と言ふ挨拶をさせに助を頭の所へ遣つた。訪問をしましたのに、お話をする事が出来なかつたのが残念であるから、是非そのうち伺はせて欲しいと頭の所からは始終さうした消息があるのであつた。さうした風流男に老いた女が聲を聞かせる事もないと自分は常に拒絶を仕續けてゐるのであつたが、助に面會がしたいからと云つて或る日暮に頭が來た。仕方が無いと云つて、揚戸を二間程だけ上げ、縁側に灯を點して、簾附きの座敷へ客を招じようとした。助が出て行つて、「早くお上りなさい。」と云ふと、上へ上つて來た。横の妻戸を開いて、「此處から。」と云ふと、此處まで歩いて來たが、一寸立留つて、「先づ私の來ました事を申し上げて下さい。」と小聲で云つた。助が自分の所へ來てさう告げたから、「さうお云ひになるのならお志のある所へ傳へた方がいいでせう。」と自分が云つてゐるのが聞えると、頭は少し笑ひながら、さやさやとよい程に衣服の音をさせて座敷へ入つて來た。助と靜かに話してゐる筈に扇の當る音だけが時時自分の耳へ入つて來た。自分の坐つてゐる座敷の方では長い間何の物音もしないのであつたら、「先日お逢ひが出来なかつたのが残念なので今日上つたのです、と君からお母様に申し上げ

て下さい。」と云つて、頭は助を自分の所へ遣した。「お母様、早く出て行つてお上げなさい。」と助に云はれて、自分は膝行して御簾の所まで行つたのであるが、頭は何とも物を云ひ出さない。此方はまして何も云はない。暫くして頼りなく思ふであらうと思ひ、少し咳拂ひをして見せた時に、「この前、折も折、丁度悪い時にお訪ね致しまして」と云ふ挨拶に續いて頭は、娘を戀しく思ふやうになつた経路を告げるのに多くの言葉を以てした。自分は、「まだ幼稚な者で、結婚の事などは話にも聞かせられない少女で御座いますから、この問題だけは御無理のやうです。」などと云つてゐるのであつたが、相手は美しく話をしようとして作り聲を出してゐるのを思ふと、此方までも苦しくなつた。日の降つてゐる日暮で蛙の聲が姦しい。夜になつてから、「此處は物騒な所で御座いますから、お客様はもとより家の者までも夜が更けますと無氣味になるので御座いますから。」と云つて歸りを促さうとすると、「いや、私もお暇をしようと思つてゐるのです。然し蛙は恐いものでは御座いませぬよ。」などと頭の云ふうちに更けて來たのを知つて、「右馬助さんの精進の日が近くなつた筈ですが、その間に代つて私に出來ることがありましたらさせて下さい。右大將は今夜の御會見に仰つしやいましたことを報告申し上げて、彼方がま

た何とお云ひになりましたかをお話し申しに明日か明後日ごろに伺ひませう。」と云ふから、立つて行くのであらうと思ひ、どんな姿か猶よく見ようとして几帳の絹を開けて見ると、縁側に置いてあつた灯は疾くに消えてしまつてゐた。自分の居間の灯は几帳などのある後に置かれてゐたのであつたから、その明りによつて外の灯の消えたのにも氣が附かないでゐたのである。自分の影が外へ映つてゐたのではあるまいかと思はれる。「意地悪く外の灯の消えてゐますのを御注意下さいませんで。」と云ふと、「そんなことはありませんよ。」と云つて歸つて行つた。

來初めた頭はその後また屢屢來て、同じやうな求婚の話ばかりをするのであつたが、自分はあの娘に對して權利を持つてゐる人がさうしようと思へば澁澁でも同意をしなければならぬが、それまでは絶對に許すものでないと決心してゐた。頭の方では、「右大將の方のお許しはもう得てあるのですから。」と云つて此方を責め立てるのであつた。「この日がいと右大將がお選び下すつたのです。二十幾日です。」と云つて頭は迫るのであつたが、助は加茂祭の使になつて參列することになつてゐたから、自分はその事に懸り切つてゐるのを見た頭は祭の濟むのを待つ風であつた。然し助は御禊の日に犬の死骸を見た爲めの觸穢で晴れの役に出なかつた。右馬

頭の方の話はどうしてもまだ早過ぎる事に思はれて、さうした結婚の仕度に懸る氣もしないでゐると、「自分から右大將がかうお云ひになつたと云つて責め立てるからとお云ひになつて彼方へ伺つて見て下さい。」とうるさく頭が云ふ爲めに、助にさう云ふと、助はその返事を持つて來た。「どうしてあの方にそんな風に仰つしやつたのですか。と私が云ひまして、お話を伺つて來ただけではいけない、あの方に見せる必要もあるでせうと思ひまして、御父様に頼みますと書いて下さいました。」

「自分もさうさせようかと思つたのだが、助を祭の使に出すことなどでその方の事は考へる暇が無かつた。若し心が變らないならば八月頃にと云ふ返事をしなさい。」

と彼の手紙は書いてある。自分はそれで安心することが出來、頭へ、「こんな風ふうに云つておよこしになりましたよ。早合點な曆は駄目だから私は云つてゐたのですよ。」と知らせてやつた。返事はしないで暫く後に自身で來て、「今日は腹立たしいことをお話しに上りました。」と取り次がせて來た。「何と云ふ大層なお言葉でせう。では此方へ。」と云はせると、「唯今まで夜も晝も伺はせて頂いて居た私なのですから、來ないやうにしては自分自身が寂しくて溜らないでせ

う。」こんな事も頭は云つた。助と話してから、歸りがけに硯と紙が借りたいと云つた。頭は出した紙へ書いたものを拵つて自分の所へ置いて行つた。見ると、

「契りおきし卯月はいかにほととぎす我が身のうきにかけはなれつつ

どうしたらいいでせう人生が悲觀されます。また夜になつてから参りませう。」

と云ふのであつた。字も上手である。直ぐに返歌を書いて、もう家の外に出てゐた頭に渡させた。

なほしのべ花橋の枝やなきあふ日過ぎぬる卯月なれども

下ノ下

右馬頭自身が結婚日に撰定してあつたその二十二日に出て來た。自分の方では娘の父である彼も急がぬと云ふ異見であることに確かな力を得て、頭がどう云はうと動かうとしないのに對して、先方は焦り抜いて迫つて來るのであつた。「右大將の仰せになる時期は餘りに遠いことで、私に悶悶として月日を送れとお強ひになるやうなものです。ですからあなたの御好意で何とかお計ひになれないものでせうか。」と云ふので、「どうしてそんなことをお云ひになるのでせう。父である人が申します時までには事實上の結婚をなさらうとする怪しからん方にあなたが見えますよ。」とかう答へると、「さうではありませんが、結婚の出來ない間でも話し合ふくらゐのことはさせて頂きたいのです。」と云ふ。「然し此處の子はまだ全くの子供で、あやにくな事に人見知

りをしてよく泣くらゐるものですから。自分がこんなに云つても耳に留めずに、限りもない寂しい風を頭は見せるのであつた。「私は心臓が破裂すると思ふ程に苦しいのですから、せめてあなたのお居間へ通して頂けると云ふことを楽しみにしてこれからは参りませう。一つづつ目的に近づいて行くと云ふ希望を持たせて下さい。私を憐んで下さい。」と云つて頭は前の御簾に手を掛けようとするので、自分は氣味が悪くなり、「もう餘程遅いでせう。平生ならあなたもさうお氣附きになる時間になつてゐますよ。」と冷静に云ふと、「あなたがこんな態度をおとりになるとは想像もしませんでした。何たることでせう。随分長い間此方へ上つてはあなたにお縋りした自分でせう。あなたは私の誠意を汲んで下さらないで、御不快な様子だけをお示しになる。」などと悲憤を見せて云ふのであつたから、「いいえ、お親しく思ふ餘りに申し上げただけですよ。お恨みになるのは無理ですよ。院とか御所とかへ出てお出でになる晝間のやうな心でお話をしていらつしやい。」などと自分は云つたが、「そのお言葉の意味は寂しいことに取れます。」こんなことをじつと坐り込んで云ふので、どうしてよいか解らなくなつて、終ひには何も云はずにゐた。「失禮致しました。御機嫌を悪くさせましたね。もう仰せがなければ何も私からは申しませ

ん。失禮しました。失禮しました。」と云ひ、頭は指を弾きながら暫く沈黙してゐた後に歸らうとして立つた。松明を供の人へ渡すやうに自分は命じてゐたが、その後で、「いらぬ、いらぬ」とお云ひになつて出ていらつしやいました。」と女房が云つてゐたから、傷ましい氣がして、翌日の早朝に、

「あの暗い夜に松明をもお命じにならないでお歸りになつたさうでしたから、御無事でしたかと伺ひます。

ほととぎすまた問ふべくも語らばで歸る山路の木暗かりけん

こんなことでお氣の毒に存じ上げました。」

唯だこの手紙は置いて來させただけであつたから、また頭の所から、

「問ふ聲はいつとなけれどほととぎす明けてくやしき物をこそ思へ非常に恐縮して居ります。」

と云ふ返事を持たせた使が來た。すねたやうなことは云つても、また次の日に、「右馬助君が

今日打合せにいろいろな人の家へ行くと云つて居られましたが、一先づ私と一所に役所の方へ行く方がよいと思つて誘ひに來ました。」と云つて頭が來た。例のやうにまた硯を貸せと云ふので、紙を添へて出した。自分へ書いて遣したのを見ると、慄へた字で、

「前生に私はどんな罪を犯してゐるこんなにもあなたから戀を妨げられるのでせうか。失望して自暴自棄なことをしましたら生きてゐることも困難になるでせう。然しもう決して御同情は乞ひますまい。出家をして高い山へ上りませう。」

などと長く書かれてあつた。返事に、

「私は恐い氣がします。何故そんなにもお云ひになるのでせう。あなたの恨みを聞かねばならぬ方は別にある筈です。高い山のことは存じませんが、谷への御案内は出来るかも知れません。」

と自分は書いて出した。その後で助は頭と同車して出かけた。そして助は官給の美しい乗馬を得て歸つて來た。

その夜また頭が來て、「この間の晩は興奮して失禮なまで烈しいことを申し上げましたのを、

考へますとますます相濟まなく思はれてなりません。今夜は右大將がお許し下さるまで大人しく待つて居ようとその決心の出来ました事を申し上げに來たのです。私はもう更生した氣分になつて居ります。死んではいけないと云つて下さいましたお言葉は服用致しますが、生命は長くもなからうと思はれます。お約束の日は指を三つ折ればいいだけの事のやうですが、考へると長く思へてなりません。その退屈な間をせめて、せめてお居間の御簾の邊りへ時時參ること、で心の慰めにさせて頂けないでせうか。」かうはきはきと云ふので、自分は其れに相當した返辭などをしてゐた。そして今夜は直ぐ歸つた。助を始終話相手に呼び寄せる頭であつた。或時に頭は誰かの描いた密畫を懷中にして持つて來た。見ると、釣殿と云ふやうな所の高欄に倚りかかつて、中島の松を眺め入つてゐる女がゐる、其處の所へ紙を附けて歌が書いてあつた。

いかにせん池の水波さわぎては心のうちの松にかからば

また獨身者らしい男が手紙を書きかけて頬杖を突き物思ひをしてゐる繪には、

ささがにの何處ともなく吹く風はかくてあまたになりぞすらしも

と書いてあつた。是れは置いて行つたのである。こんな事が絶えずあつて、娘の父である彼に猶時期を早めることを勧めてくれと云ふやうな事を常に頭は云つてゐたから、

「あなたからのお返事を見せてあの方に納得して頂かうと思ひます心から催促がましく申すのですが、どうすれば宜しいでせう。私からはもう始終のことで返辭に困ります。」かう彼へ書いてやると、

「時期は前に報らせた筈なのに何故さう催促をしてくるのだらう。その八月以前の現在に於て其方そなたであの男を丁重に扱ひ過ぎてゐると云ふことが世間の評判になつてゐる。そのことでは自分があなたに恨みを云つて上げたいのだ。」

こんな返事が來た。戯談であらうと初めに思つたのであつたが、その後も彼は屢屢其れを繰返した。不思議に思つて、

「私が御催促をしないのではありませんが、うるさく思へたものですから、その問題に自分

は關係をしないと云つてゐますのに、猶頻りに迫つてお出でになりますから、見るに見かねての事だつたのです。それですのにあなたは妙なことをお云ひになりますね。

今更にいかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのがれせぬ身を

赤面されてなりません。」

と書いて自分は彼へ送つた。頭は今月中に結婚をする許可が得たいと頻りに云つてゐた。

例年の此頃似ず杜鵑がよく鳴く。杜鵑館をとほしてと云ふやうにも鳴く初春であつたから、頭の遣す手紙にも、

「例に異つた杜鵑の聲にも、あの鳥も平常と違つた物思ひがあるのであらうと同情がされま

す。」
 などと書かれてあつた。頭は自分に持つ尊敬を忘れるやうな手紙は書かず、戀に取られるやうな艶な交渉は少しも自分との間にないのであつた。助が馬槽を暫く頭に借りてゐた頃には、手紙の端に、

「助の君にもう用が済みましたら飼馬桶が無い儘でゐて不自由ですからとお傳へ下さい。」
 こんな事も書いて來た。返事にも、

「飼馬桶は置いた所が解らなくなりましたから、頂いてしまふことにさせて下さいませんか
 と助は申してゐます。」

こんな用を書くのであつた。また彼方から、
 「桶の置いてある所は解つてゐるのです。打ちやられた桶は捜しに來てくれる人を待つてゐるらしいのです。」

と云つて來た。八月までの長さに倦怠を覺えたのか、頭から何の音信もなくこの月は經つた。五月の四日に雨が大雨りに降つてゐる時、頭から助の所へ、

「雨の時間がありましたら宅へお出下さい。あなたにお話のしたいことがあるのです。お母様へは、私自身が不運な生れであることをつくづく思ひ知りましたからもう何も申し上げないとお傳へ下さい。」

こんな手紙が來た。かうして呼び寄せても別に用事と云ふものはなくて閑談をしたり、遊び

事をさせたりして歸すのであつた。今日はこんな雨であるが同居してゐる妹が神詣でをすると云ふので、閑暇な身の上であつたから自分も同行することにした。或る人が、「女の神様へは著物を拵へて上げるのがいいですよ、さうして御覽なさい。」と傍へ来て勧めた爲めに「それは試して見よう。」と云つて、薄い絹で人形の著物を三枚縫つた。その著物の下前へ皆一つづつ自分は歌を書いた。祈る心は神様がお解りになつて下さるであらう。

白妙の衣は神にゆづりこん隔てぬ中に返しなすべく

唐ごももなれにしつまを打ち返しわが下がひになすよしもがな

夏衣たつやとぞ見る千早振る神をひとへに頼む身なれば

日の暮に家へ歸つた。翌日は五日の節句である。夜明に兄が来て、「どうしたのですか、今日の仕度は、何故早くして置かないのかね。夜の間にして置くのがいいのだよ。」などと召使に云

ひ、菖蒲を軒へ葺かせてゐるやうであつたから、自分も起きて、揚戸を上げさせようとしてすると、兄が、「もう暫く其儘にして置きなさい。是れが濟んでから奥さんが御覽になる方が節句らしくていい。」かう云ふのであつたが、皆もう起きてしまつたので戸も開けられてしまつた。昨日の吹き返しの風が菖蒲の根の匂ひを含んでゐた感じのよい朝であつた。兄は縁側に助と二人で坐つて、「ありとあらゆる木と草を集めて珍しい薬玉を拵へよう。」と云ひ、木や草の葉を選び出しながら、「此頃は杜鵑と云ふ鳥が珍しい鳥でなくなつて、こんなに草や木へ澤山に糞をして歩くのぢやないか。」などと悪口を云つて居るにも拘らず、二聲も三聲も空から杜鵑の聲に聞えて來たのを面白がらぬ者もなく、「あしびきの山ほととぎす今日とてやあやめの草の音に立てて鳴く」などと云ひ出し戯れ合つてゐた。少し晝近くなつてから、頭の所から、弓の稽古に行くので一所に出たいと云ふ使が助へ來た。「お供をませう。」と助は答へたのであつたが、そのうちまた早く早くと云ふ二度目の使が來たので急いで出た。その翌日また早朝から頭は使を遣して、

「昨日は弓に夢中になつておいでになつたから話もよく出来ませんでした。今日若しお暇

があればいらつしやい。あなたのお母様が無情でいらつしやることは何とも申し上げやうがない。然し長く生きてゐましたら私がどんな人間であつたかが解つて頂けるであらうと思ひます。死んでは唯だこれだけで價値のない人間と思はれるだけでせう。然し是れはあなただけへ内密で云ふことですよ。」

こんな手紙を助へ送り、自身は來ないのであつた。また三日程して早朝から、

「よく相談がしたい。そちらへ伺ひませうか。」

と使を頭が遣した。「早くお行きなさい。此處へ來て頂いても仕方がない。」と云つて、自分は直ぐに助を出してやつた。「別に何の用でもありませんでした。」かう云つて助は歸つて來た。また二日程して、助の所へ「是非聞いて頂きたいことがあります。來て下さい。」と云つて來た。「直ぐ伺ひませう。」と返事をして、まだ暫く家を出ないでゐる間に雨が大降りに降つて來た。それが夜にかけて降つてゐたのであるから、助は頭へ失禮をしたわけである。せめて手紙でお詫びをしようと助は云つた。

「困つた雨になつたものですから弱り抜いて居ります。こんな風に思つてゐます。」

絶えず行く我が中川に水増り遠方人ぞ戀しかりける。」

返事、

逢はぬ瀬を戀しと思はば思ふどちへん中川に我れを住ませよ

こんな使の往復してゐるうちに雨が止んで、頭自身で出て來た。そしてまた結婚の時期の遠いことばかりを云つて歎く。「三つとお云ひになつた指は、もう直ぐに一つだけ折ることが出来るやうになつたではありませんか。」と云ふと、「さあ其れが確實に期待してよい事かどうか解らないのですからね。人生のことですから、何時どんなことがあるか解りませんですよ。また新しい指を折つて行かねばなくなるかも知れません。右大將の曆を中だけ切つて都合よくその時を早めるやうに繋ぎ合す法はありませんからねえ。」こんな事を云ふのが可笑しくなつて、「さうですね、秋に來る雁を早く啼かせることにして」などと云ふのを聞いて頭は朗かに笑つた。自分はその丁重に扱ふ評判があると彼に云はれたことを思ひ出して、「ほんたうは私から大將に

日の催促が出来ないやうな事になつてゐるのです。」と云つた。「それはどう云ふ理由なのか。その理由だけでも伺はせて下さい。」こんな風に云つて責めるのを聞いて、眞實のことをこの人に知らせてやらう、然し言葉にすれば云ひ難いこともあるからと思ひ、「お目にかけますのも善くない氣のすることですが、私としてこの催促のしにくい事情を、これで知つて頂くために。」かう云つて、彼の手紙を見せてならぬ所は破つて、そのあとを頭に渡すと、縁側へ出て朧ろな月光に透して長く讀んでゐる風であつたが、座敷へ歸つて、「字は紙の色なんかに紛れて少しも讀めません。晝間伺つた時に讀みませう。」と云ひながら頭は彼の手紙を自分へ返した。「もう破つてしまひます。」と云ふと、「もう暫く其儘にして置いて下さい。」などと云つてゐた。「其の事を少しも伺つた顔をしなで置きませう。唯だ私は自分の苦しい氣もちに堪へかねて、謹むべきことであると人からも聞いてゐながら、大びらではありませんがあなたから返事に頂くお歌を時時口に上せたりしたことが御座います。明朝役所でしなければならぬ用がありますから助さんに一寸その話をしてからまた伺ひませう。」と云つて頭は立つて行つた。翌朝になつて昨日頭に見せた手紙は、前に破つて置いたと思つた所がその手へ渡したもので

あることを發見した。また破つてしまつた所に、「いかなる胸か」などと云ふ自分の歌を書きつけておいたものがあつたらしい。まだ早朝であつたが、頭から助の所へ、

「風邪を引いたものですから、お約束の時間に役所へは行けません。私の家へ正午頃に來て下さい。」と云ふ手紙が來た。また大した用もないのであらうと助が出漕つてゐる所へまた自分宛の手紙が來た。それは、

「平生よりも早く聞いて頂きたいことがあるのですが、御遠慮がされて伺つて申し上げることが出来ません。昨夜のあの方のお手紙はどうしても讀めませんでした。特別にその話をし下さることはお困りになる事と思ひますが、折折のお話の序でに聞かせて下さいましたらと思ひますが、私のやうな者からそんなお願ひをするのは僭越かも知れないと、何に由りまして自分のふがひなさが憐まれます。」

こんな内容で、平生よりも氣を使つた筆の跡で、可憐な氣のするものであつた。返事は、さう必要でない物を書くべきでないと思つてしなかつた。翌日になつて自分は昨日の頭の手紙に返事をしてやらなかつたことが傷ましくなつて、その態度は年に似ぬ若若しいことであると思

ひ直して、返事を書いた。

「昨日はある故人の日で引籠つて寝たのですが、日が暮れましてからお手紙を拜見せよと云ふ暗示でもありましたやうに起出したのでした。折折話に混せて聞かせるやうにと仰せになりましたが、それが出来るかどうか解りかねます。お話をする機会と云ふものを持たなくなる方がほんたうは私のために氣樂なことになる筈なのです。あの紙の色は晝間でも字をよくお讀ませないだらうと思はれます。」

これを持たせて遣つた時に、頭の家には僧達が澤山來てゐて取り込んでゐるらしかつたので使は置いたままで歸つて來た。次の日早く頭から、

「變つた姿の客が澤山來てゐましたし、お使の來ました時はもう夜も遅くなつてゐましたので失禮しました。」

歎きつつ明し暮らせばほととぎすこの卯の花の蔭になきつつ

どうしたらいいでせう。今夜はお詫びに上ります。」

と手紙が來た。使は返事を持たせて遣つたのであるから直ぐに歸つたのであらう。それをこんなにまた恐縮されるわけはないと思つて、

蔭にしもなか鳴くらん卯の花の枝にしるぶの心とぞ聞く

と先方の手紙へ書き付け、表書きの名を消して、横に、

「どうかなすつていらつしやるのではないかと云ふ氣がして。」

と自分は書いて返した。丁度其頃である、左京大夫がお亡れになつたと云ふ報せがあつた。病死者が多い爲に宮中でも御謹慎日と云ふものが多くなり、山寺へ參籠する人が殖えて來た。時時頭からの手紙が來て、そして六月も終つた。七月になつて、結婚期と決められた八月が近づくのその子はまだ極めて幼稚なものであつたから、これでどうなるかと云ふ心配で、自分の彼の爲めにする煩悶は忘れた形であつた。七月の二十日頃になつた。頭は相手もよく知らずに淺はかにこの家の娘との結婚を待つてゐるものであると思ふと、將來が不安に思はれてならない頃に、或人が來て、「右馬頭さんは人の細君を盗んで、或る所に隠れて同棲してお出でにな

るのですよ。愚かな事をすると思はれる。こんなことを自分に告げた。思はずほつとした息をついたのは自分であつた。是れで總ていいと思つたのである。八月となればこの上言ひ逃れやうがないのを苦勞にしてゐたのであつたからと思ひながらも、心の一方では頭に對して濟まない考へを持つものであると自嘲もされる自分であつた。そのうちにまた頭から手紙が來た。此方から詰問でもしてやつたやうに、

「運命の奔穴かじあなに落ちたやうな状態です。是れは自分の意志ではありませんでしたと云ふやうな事は申し上げますまい。光明のある道に手引きをして下さるあなたとして信頼してゐた私なのですから、かうなりましたもお見捨てにはなりませんまいと頼みにされます。」

「御意志でないことをしてお出でになるとは何のこととせう。私を他の道への手引きに頼んだことがあると仰せになりますことによつて、今もなほ私を念頭に置いてゐて下さいませうに安心されました。」
かう書いた。

八月になつた。痘瘡たふしの流行が甚しくなつて恐しい不安が此處彼處あちこちに擴がつて行つた。二十日頃にはこの町の邊へも病が入つて來た。そして助が重い痘瘡に懸つた。どうすればよいかと思ひ、もう交渉の絶えたやうな彼の所へも、告げてやらなければならぬかと思はれる程であるから、自分の心配は云ひやうもないものであつた。終ひに彼に知らせる事にして手紙を出す時、返事は簡単に書いて遣された。其の後も唯だ使ひに、言葉をもつて「容體はどうか。」と聞かせに來るに過ぎなかつた。それ程親密でない人さへ見舞つてくれるものと思ふ恨めしさ、子の病を悲しむ心と一つになつて自分を苦しめた。右馬頭も面目無い風をしながら度々見舞ひに來てくれた。九月の一日になつて助の病は癒えた。八月の二十幾日に降り初めた雨がこの月になるまでも降り續いてゐて、自分の家の前の中川も加茂川と一所になつてしまふかと思はれる程に双方とも増水をしてゐるのであつたから、今にも家が押し流されるやうな氣さへした。門前の田はまだ皆刈ることが出來ず、僅かな時間を利用して燒米の材料になるくらの稻だけが刈られ稻掛けに置かれてあつた。痘瘡の流行はますます劇しくなつて、彼の兄の故一條太政大臣の子息が二人ともこの十六日に亡くなつたと云つて世間で騒しく取沙汰をした。遠くにゐて

其れを想像して見るだけでも非常に悲しい事に思はれた。それに由つても助の快癒したことは限りもない嬉しいことである。病は癒つたとは云つてもまだ衰弱の恢復しない助は外出もせずになるた。二十日頃に珍しく彼の手紙が來た。

「助の病氣はどうですか。自宅の方の息子達の病氣はもう皆癒つてゐるのに、どう云ふわけで彼れだけが顔を見せぬかと心配な餘りにお尋ねするのです。私をひどく憎んでおいでになるから、双方で意地の張り合ひのやうになつてゐる今日までの月日でした。忘れえないことは心にありながら。」

こんな風な濃やかなものであるのを自分は不思議に思つた。返事には彼から尋ねて來た助の病氣の経過などばかり書いて、ほんの端の方へ、

「ほんとうに忘れえないものを忘れうる方法はあるものでせうか。」と書いた。助が初めて外出した日に、あの時以來始終手紙を送つてゐた娘の車と行き合つたのであるが、どうしたのか二つの車の胴がからみ合つて離すことが困難であつたさうである。その翌日、

「昨晚の車があなたのだとは氣が付きませんでした。それにしても、

年月のめぐりくるまの輪になりて思へばかかるをりも有りけり

と云へます。」

先方は受け取つて讀んだ後で、その手紙の端へ、拙い字で、

「それは少しも私の方に覺えのないことです。」

と書き、重點までも打つて返したのは感じの宜しくない話である。かうして十月になつた。三十幾日に方位除けのため行つた親戚の家で、「あのいつか方位除けだと云つて右大將がお出でになつた女の所で子が生れたらしい。」と云ふ話を聞いた。その女の唯だ噂でなく子の出生と云ふやうな事を聞くのであるから自分の心は動くわけであるが冷靜にしてゐた。夜になつてから題を出して皆で歌を詠まうとしてゐる時に、兄が自分の近くへ來て、懷中から檀紙に書いた手紙の枯れた芒に附けてあるのを取り出した。「誰れのですか。」と云ふと、「よく見て御覽なさい。」と云ふ。開けて灯影で見ると、手跡は彼によく似てゐた。書いてあることは、

「いかなる駒かとお云ひになりましたがそんなことはありません。

霜枯れの草のゆかりぞ哀れなるこまがへりてもなづけてしがな

貴女にどれほど同情してゐるか知れません。」

こんな事であつた。「いかなる駒か。」と云ふ七文字は口惜しいことを云ひかけられた時に彼へ書いた歌の句なのであるから不思議でならない。「誰れのですか堀川の殿様のですか。」と云ふと「さうです。太政大臣のお手紙です。彼方の隨身をしてゐる某があなたの家の方へ行つて、そして此處へ来ていらつしやることを聞いて來たと云ひますから、間違ひだと云つて請取るのを斷つたのですが、確かに聞いて來たと云つて渡すものですから。」兄はかう答へた。どうしてあの歌をお聞きになつたであらうと、どんなに考へて見ても解らないことは解らない。皆でその事を云つてゐると、老いた父がそれを聞いて、「勿體ないことだ。失禮にならないやうに直ぐ返事を書いてお使に渡すべきだ。」と云つて恐縮がる。自分も其れ程無頓著に返歌を作るつもりでなかつたのであるが、出來たのを見るといい加減なものに過ぎない。

ささ分けば荒れこそまさめ草枯の駒なつくべき森の下かは

これを書いてお返事にしたのであつた。その後或人が、「あの歌の返しをもう一度大臣はしようとしたのだが、半分だけは出來て後がどうも今によく出來ないと云つていらつしやる。」と堀川の大臣の消息を傳へたのを自分は聞いて、長く出來ないと云ふことが可笑しくてならなかつた。

加茂の臨時祭が明後日と云ふ日になつて助が俄かに舞人に指定された。その爲めに珍しい彼の手紙が來た。

「そちらではどうしますか。必要なものは大抵自分の手で調べて置きました。宮中の試樂はまだ自分の觸穢中になつてゐて、參内して見るわけにはゆかない。其方へ行つて彼れを仕立て出してやりたいのですが、私の行くことをあなたは許してくれないだらうから、どうすればよいかと迷つてゐます。彼れのことと不安でならない。」

とある。はつとして、今更らまた彼に逢つて何にならうと、其れから其れへと思はれる自分

であつたから、「早く装束を着けてお父様のお宅へ先づ寄つてお目におかけなさい。」と云つて、助を急がし立てて出してやつた後で自分は泣いてゐた。彼は自身も庭へ下りて舞のいくだりを一所に舞つて見せた上、助を御所へ出したさうである。祭の日は、今日を見物に出ないで居られるわけもないと云つて、その場所へ行つて見ると、餘り目立たぬ檳榔毛の車で、前の方の御簾の下からは綺麗な紅い練絹に紫の厚織物を重ねた袖が出てゐたから女のゐる車であると思つて、何かが、車の後と相面した家から六位の人の太刀を佩いた姿が出て来て、車の前方に蹲いて何かと車上の人に云つてゐるのに驚いて、目を留めて見ると、その車の周囲はいつの間にか赤い人（五位の制袍は赤色、四位以上は黒色）黒い人で充満いっぱいになつた。よく眺めて見ると皆彼に從屬した人達なのであつた。例年よりも神前の式が早く初つて、高官達の車で來るのは皆彼の車に氣が附くのか、立留つて其處よりは進まずに見物の場所を決めてしまつた。自分の愛兒は俄かに加へられて出たにも關らず、僕の人達が皆綺麗な服装をしてゐた。高官達が手に菓子などを差し出して賞め詞をかけるのを見てゐて自分は光榮を感じた。また老いた自分の父も見送送がされず一般の見物人の中中にゐたのを、皆の退散するのを待つて呼び出して彼は自身の車か

ら御酒を出し杯をさしてゐるのを見た時だけは自分も彼に好意が持てた。助に父母の中違へを其儘にして置いてはならないとか、今日を機會として和解をせねばならないとか、こんなことを中に立つて云ふ人があつて、その爲めに加茂の八橋と云ふ所邊りかと思ふが彼から次の歌が送られて來た。

葛城や神代のしるし深からばただ一ことにうちも解けなん

今度だけと思つて返歌をした。

かへるさのくもでは何處八橋のふみ見てけんと思ふかひなく

其れに對して彼から、

通ふべき道にもあらぬ八橋をふみみてきともなに頼むらん

これは書き役の手になつた字であつた。返事、

何かその通はん道のかたからんふみ初めたるあとを頼める
また彼から、

尋ねらんかひやなからん大空の雲路は通ふあとはかもあらし
何處まで後退せぬと云ふ風の見える彼へまた、

大空の雲のかけはし無くばこそ通ふはかなき歎きをもせぬ
彼から、

ふみみれど雲のかけはし危しと思ひ知らずも頼むなるかな
また自分から、

猶をらん心たのもしあしたづの雲路下りくるつばさやは無き

今度はもう暗くなつたからと云つて返事はなかつた。

十二月になつた。自分が、

片敷きし年は経れども狭衣の涙にしむる時はなかりき

この歌を送つた時、彼の家では外出をされたからと云つて返事をくれなかつた。次の日あたりであつたが返事を頂きたいと云つてやると、そは楓稜はの木の枝に「見た」とだけかいた紙を付けて遣した。それで自分は、

我が中はそばみぬるかと思ふまで見きとばかりもけしきばむかな
と云つてやつた。返事、

天雲の山のはるけきまつなればそばぬる色はときはなりけり

今年は年内に節分がある年であつたから、その日は此家へ来て欲しいなどと云はしてやつて、

いとせめて思ふ心を年のうちに春來ることも知らせてしがな

と歌を送つた。返歌はなかつた。もう年は僅かで明けるのであるから、自分を待たずに今年の残りの日は過ぐしてもよいであらうと云ふやうなことは書いて來た。

かひなくて年くれはつるものならば春にも逢はぬ身ともこそなれ

今度も返歌はなかつた。どう云ふわけであらうと自分が思つてゐると、節分に彼を待つと云ふ愛人が多いから駄目なのであると云ふ話が聞えて來た。さうであらうと思ふのであつた。

我れならぬ人待つならばまつと云はでいたくな越しそ沖つ白波

返事、

越しもせず越さずもあらず波寄せの濱はかけつつ年をこそふれ

年の押しつまつたころに、

さもこそは波の心はつらからめ年さへ越ゆる松もありけり

返事、

千年ふる松もこそあれ程もなく越えてはかへる程やとほかる

妙なことを云ふ。何を云ふのであらうと思つて、風の強くなつて來た時分にまた、

吹く風につけても物を思ふかな大海の波のしづ心なく

と書いて遣つた所が、

「あなたの相手は今日を豫期してゐた。」
 と他の人の手で書いた返事は一つの葉だけが残つて附いてゐる枝に結ばれ、そして、氣の毒に思つてゐると云ふやうなことも書き、

我が思ふ人は誰ぞとは見なせども歎きの枝にやすまらぬかな

と云ふ歌もあつた。この年はひどく荒い冬と云ふやうでもなく薄雪が二度程降つただけであつた。

助の元日の服飾とか、七日の白馬の節會に出る衣裝の仕度とかをしてゐるうちに三十日になつた。元日に用ひる絹とか何とかを自分で折つたり、人に巻かせたりしながら考へて見ると、彼を迎へる日が無いまままで今日になつたことが情なく思はれるのであつた。年末の魂祭の棚を見ても悲しみに溺れさうになる自分であつた。晦日であるから夜がずつと更けてから門を叩く音が續く。

(本文はこの後を缺いてゐる。今日の本に後へ附けられてある歌を集めたものは後人が補つ

たと見てよいのである。そして文章は皆歌の端がきであるから現代語に書き變へない。) 佛名の朝あしたに雪の降りければ、

年のうちにつみ消つ庭に降る雪はつとめてのちは積らざらん

殿かれ給ひてのち、久しう有りて、七月十五日盆の事など聞え給へる御返り事に、

かかりけるこの世も知らず今とてやあはれ蓮の露も待つらん

四の宮の御子おんねの日に、殿に代りて、

峰の松己がよはひの數よりも今いく千世ぞ君に引かれて

その子おの日の日記を、宮に侍ふ人に借り給へりけるを、その年は後の宮亡せさせ給へりける程に、暮れ果てぬれば、またの年春返し給ふとて、端に、

袖の色變れる春を知らずして去年にならへる野邊のまつらん

尙侍なむじのかんの殿、天の羽衣と云ふ題を詠みてと聞えさせ給へりければ、

ぬれぎぬに天の羽衣結びけりかつはもしほの火をし消たねば

陸奥の國にをかしかりける所所を繪に描きて、持て上りて見せ給ひければ、

みちのくのちかの嶋にて見ましかばいかに躑躅のをかしからまし

或人、加茂の祭の日婿取りせんとするに、男の許より逢ふ日嬉しきよし云ひおこせたりける返事に、人に代りて、

たのみすな御垣をせばみあふひ葉はしめの外にもありと云ふなり

親の御忌にて一つ所に兄弟たち集りておはするを、他人こゝろひと人は忌みてて家に歸りぬるに、一人

とまりて、

深草の里になりぬるやどもなどとまれる露の頼もしげなき

かへし、爲雅朝臣、

深草の誰れも心に茂りつつ淺茅が原の露に消ぬべし

當代の御おん五十日いに、猪の子のかたを作りけるに、

萬代を呼ばふ山邊の猪の子こそ君が榮ゆるよはひなるべし

殿より八重山吹を奉らせ給へりけるに、

誰れかこの數はさだめし我れはただとへとぞ思ふ山吹の花

はらからの陸奥守にて下るを、長雨しける頃、其の下る日晴れたりければ。彼の國に、河伯か

と云ふ神あり。

我が國の神のまもりや添へりけんかはらけかりし天つ空かな

返し、

今ぞ知るかはくと聞けど君がため天照る神の名にこそはあれ（日記の作者の歌）

鶯柳の枝にありと云ふ題を、

我が宿の柳の絲は細くともくる鶯は絶えずもありなん

傳の殿の始めて女の許がやり給ふに代りて、

今日ぞとやつらく待ちみん我が戀は初めもなきがこなたなるらん

度度の返り事無かりければ、時鳥の型を作りて、

飛びちがふ鳥の翅をいかなれば巢立つ歎きに返さざるらん

猶返り事せざりければ、

ささがにのいかなるらん今日だにも知らばや風の亂るけしきを

また、

絶えてなほ住江すみのえになき中ならば岸に生ふなる草もがな君

返し、

住吉すまじの岸に生ふとは知りにつり摘まん摘まじは君がまにまに

實方の兵衛の佐にあはすべしと聞き給ひて、少將にぞおはしける程の事なるべし。

柏木の森だにしげく聞くものをなどか三笠の山のかひなき

返し、

柏木も三笠の山も夏なれば茂りてあやな人の知らなく

返り事するを親兄弟制すと聞きて、おやからまろ小菅にさして、

打ちひそみ君一人見よまろ小菅まろは人すげなしと云ふなり

煩らひ給ひて、

みつせ川浅さの程も知られじと思ひし我れや先づ渡りなん

返し、

みつせ川我れより先きに渡りなば汀に侘ぶる身とや成りなん

返り事する折、せぬ折のありければ、

かくめりと見れば絶えぬるささがにの絲故風のつらくもあるかな

七月七日

七夕に今朝ひく絲の露を重みたわむけしきも見でややみなん

是れはあしたの、

別るよりあしたの袖ぞ濡れにける何をひるまの慰めにせん

入道殿(藤原道長)、中納言爲雅の女(作者の姪)を忘れ給ひける後、日蔭の絲結びてとて給へりければ、其れに代りて、

かけて見し末も絶えにし日かけ草何によそへて今日結ぶらん

女院いまだ位におはしまし折、八講行はせ給ひける捧物に、蓮の珠數參らせ給ふとて、

となふなる波の敷にはあらずともはちすの上の露になりなん

同じ頃、傳の殿橋を奉らせ給へりければ、

かばかりも訪ひやはしつる杜鵑花橋のえにこそありけれ

返し、

橋のなりものならぬ身を知ればしづえならではとけぬとぞ聞く

小一條の大將白川におはしけるに、傳の殿を必ずおほせとて待ち聞え給ひけるに、雨いたう降りければ、えおほせぬ程に、隨身下鞍をおほへと聞え給へりける返り事に、

濡れつつも戀しき道はよがなくにまだきこずると思はざらん

中將の尼に家を借り給ふに、貸し奉らざりければ、

蓮葉はすはの浮葉をせばみこの世にもやどらぬ露と身をぞ知りぬる

返し、

蓮にも玉のよとこそむすびしか露に心を置きたがへけり

粟田野を見て歸り給ふとて、

花すすき招きもやまぬ山里に心の限りとどめつるかな

故爲雅朝臣、普門寺に千部の經供養するにおはして、歸り給ふに、小野殿の花いと面白かりければ、車引き入れて歸り給ふに、

薪樵たきぎすることは昨日につきにけりいざ斧の柄はここに朽たさん

夏草

駒やくる人やは來ると待つ程に茂りのみます宿の夏草

戀

思ひつつ戀ひつつは寢じ逢ふと見る夢もさめてはくやしかりけり

いはひ

數知らぬ眞砂まきごに鶴たづの程よりは契りそめけん千代ぞすくなき

心得ぬ所々はもとのままに書けり。賀の歌は日記にあれば書かず。

駒くらべの負けわざと思しくて、白銀の瓜わりこをして、院に奉らんとし給ふに、碁の筈に打たんとして攝政殿より歌聞えさせ給へりければ、

千代も經よたちかへりつつ山城のこまにくらべし瓜の末なり

繪の所に、山里に眺めたる女あり、時鳥啼くに、

都人寢て待つらめや時鳥いまぞ山邊を鳴きて過ぐなる

この歌は寛和二年歌合にあり。

法師の船に乗りたる所、

わたつ海はあまの舟こそありと聞け乗りたがへても漕ぎてけるかな

殿かれ給ひて後、通ふ人有べしなど聞え給ひければ、

いざさらばいかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を

歌合に、卯花

蟬

おくと云ふ蟬の初聲聞くよりぞいまかと萩の秋を知りぬる

蚊遣火

咲きにける枝なかりせば床夏も長閑けき名をや残さざらまし

あやなしや宿の蚊やり火つけ初めてかたらふ蟲の聲をさけつる

郭公

卯の花の盛りなるべし山里の衣さぼせるをりと見ゆるは

ほととぎす今ぞさわたる聲すなるわが告げなくに人や聞くらん

菖蒲草

菖蒲草今日のみぎはを尋ねれば根をしりてこそ片寄りにけれ

螢

五月雨やこぐらき宿の夕さればおもてるまでも照らす螢か

床夏

和泉式部日記

和泉は情人の爲尊親王のお薨れになつた歎きの中に身を置いて、明けても暮れても唯だ人生のはかなさばかりが思はれた。翌年の春が来り春が去つても、まだ和泉は傷ましい胸をその儘抱いて居た。

四月の十日過ぎになつて、庭の木立は枝が繁りに繁つて蔭になる所は晝も薄暗くなつた。低い土塀の上に伸びた草の色も、人には何とも思はれないことであらうが、今の和泉には心の底まで沁み通るやうな緑であると思はれた。縁に近い處で和泉が涙ぐんでじつと庭の内を見て居ると、透垣の外へ人の近附いて来る影が見えた。誰であらうかと思つて猶じつと見て居ると、それは故親王にお使はれて居た童侍であつた。自分の歎きの種も其外に無い人の縁りであることが知れて、和泉は嬉しく思つた。

「何故久しく出て來なかつたの、もう歸つて來ない昔の形見に、その御縁のある人達には私は誰にも逢ひたく思つて居るのに。」

和泉はこんな言葉を侍女に取次がせた。

「別段用も御座いませんに、上りましては厚かましい者だと思ひにならないかと思ひま

して御遠慮なんかして居りますうちに、ちよいちよいした旅行なんかを仕初めましたものですから、すっかりと御無沙汰をいたしました。今日は一寸申し上げることがあつて参りました。私は近頃帥の宮様へ上つて居ります。心細いものですから、先の宮様のお代りとしてお仕へしたくなりましたので、さうお願いいたしましたので御座います。」

と童侍は云ふのであつた。

「それはいいことね。併し、帥の宮様ではお代りにお仕へ申し上げるのに、前の宮様のやうな御愛嬌の多い、御大様な所が御不足でおありにならないこと。」

と侍女は童に云つた。

「けれども何處かお懐しい所がおありになるから、上つて居るのだらうね。」

これは和泉の言葉である。

「さやうで御座います。」

と童は云つた。

「この花を帥の宮様へ差上げてね、どう思召しますかを伺つて来て下さいな。」

和泉は一枝の橘の花を童に渡した。

「花橘の香を嗅げば昔の人の袖の香ぞすると云ふやうな御返事を頂いて参りませう、併し初めてでおありになるので御座いませうから、何か一寸御挨拶のお言葉でも御座いましたら伺つて参りませう。」

と童は云つた。道理ではあるが、言葉で云ふことは困ると和泉は思つた。帥の宮様はお若い、浮氣な方と云ふ名も取つておいでにならないのであるから、自分が歌で御交際を初めても迷惑なやうなことは何處からも起つて來ないであらうと思つて、

かをる香によそふるよりは郭公聞かばや同じ聲やしたると

和泉はこの歌を書いて添へることにした。

帥の宮は縁近い座敷においでになつた。申し上げたいことが起つたやうな素振をお見せするので、和泉の家へ行つた童侍を召された。

「何か用があるのか。」

童は橘の花と歌とを奉つた。

同じ枝に啼きつつ居りし郭公聲は變らぬものと知らなん

と云ふ返歌を宮はお書きになつて、直ぐ童にお渡しになつた。

「このことは秘密にして置け。輕率な男のやうに世間の人から誤解されるから。」と云ひ捨てて宮はお居間へお入りになつた。

和泉は、帥の宮の御歌にお懐しさと、ゆかしさを覺えずには居られなかつた。併し折返してまた歌を差上げることなどは御遠慮する方がいいであらうと心の中に嘯くものがあつた。翌日、帥の宮から和泉の處へ、

打出でもありにしものをなかなか苦しきまでも歎く今日かな

こんなお歌が來た。何と云ふ徹底した人生觀も持たずに、唯感情にばかり馳せ易い和泉は、自身と同じ悲哀を悲哀とする人のある嬉しさに、憤みと云ふ道徳などに關つて居られないやう

な氣になつてしまつた。それで

今日の間にかへて思ひやれながめつつのみ過す月日を

こんな返歌を奉つた。

帥の宮の御消息は絶えず和泉の所へ來た。和泉からの返事も宮は時時お受取りになつた。帥の宮と交渉を初めてからの和泉は、以前のやうには沈んでばかりも居なかつた。

また宮からお手紙が和泉の處へ來た。宮のお言葉は多い。

語らば慰むかたもありやせん云ふかひなくは思はざらん

こんな歌の後に、

亡き人に就きての物語もなさばや、聞かばやと切に思はれ候。今日の暮の訪れを許し給へ、忍びて參るべく。

と書かれてあつた。

慰むと聞けば語らまほしけれど身の憂きことに云ふかひぞ無き

唯今の私は人にもあらず、女にもあらず、亡き人に魂の總てをもて焦れ居り候ふ空虚の身に候へば、御話の相手にいかばかり興味少く覚え給ふらんと恥ぢられ候。

和泉はこんな御返事をした。

宮は和泉の家へ微行でおいでにならうとして、晝から御心仕度を遊ばされた。何時も和泉との間の文の取次をする右近の尉をお召しになつて、

「自分は一寸出掛けたい處があるのだから、そのつもりで居て呉れ。」

と仰せになつた。右近の尉にはもうお行先がはつきりと解つて居た。

「目立たない風にして來ました。」

和泉の家へ帥の宮は斯うお云ひ入れさせになつた。和泉は困つたことが起つて來たと思はないでも無かつた。併し晝も自分から御返事がお上げしてあるのであるから、留守と云つてお歸しすることは出来ない、家に居ながら面會を御謝絶すると云ふことはもとより云へないと、い

ろいろに思つたが、結局今日だけはお話を伺はうと云ふ氣になつた。

西の妻戸の外に圓座を置いて、和泉は宮を屋内へお招じした。この宮が美男であらせられると云ふことは誰も云ふことであるが、それに違はず類のない方であらせられると和泉は思つた。物越しに居る自身も思はず姿が顧みられた。話の長く續いて居るうちに月が上つた。邊りが眩い程明るくなつた。

「私のやうな無勢力な、蔭の者のやうな人間は、こんな場所に居ることが晴れがましくてならない。室内へ入れて貰へないでせうか。私はあなたの幾人かの知合の美男のやうな眞似は決してしませんから。」

と宮はお言ひになつた。

「とんだことをお言ひ遊ばします。私は後にも前にも今晚だけ唯だ一度きりお話相手をさせて頂かうと存じまして、かうして居るので御座います。もうこれからは御迷惑なお思ひもおさせいたしませんから、御辛抱を遊ばして下さいまし。」

和泉はこんなことを云つた。夜は飽くまで更けた。

「このままで夜を明かさないとはいえないのですか。」
宮はかうお云ひになつた後で、

はかもなき夢をだに見て明しては何をか夏の夜語りにせん

この歌をお口誦みになつた。

夜とともに寝るとは袖を思ふ身ものどかに夢を見る宵ぞ無き

和泉は帥の宮の危く進まうとする御感情をこんなことでおはぐらかせしようとしたのである。

「私は戀しく思ふ人があつても、其處へ逢ひに来るまでの手順を取るのがなかなか容易で無い身體なんです。何度も来てあなたが心から許してくれる時を待ちたい心はあつても、それは實行の出来ないことと思ふから、こんな無作法もします。私は悲しい程あなたが戀しいのだから。」

かう云つて宮は室内へお入りになつた。和泉には抵抗する意志も力も乏しかつた。

「當分は絶対に私達の關係を祕密にしなければならぬよ。」

夜明にお歸りになる前の宮は、こんなことを和泉へお囁きになつた。

今あなたはどう思つて居る。私は感傷的な不思議な氣分になつて居る。

戀と言へば世の常のとや思ふらん今朝の心は類だに無し

これは朝になつて和泉が受取つた宮のお手紙である。

世のつねのこととも更に思ほえず初めて物を思ふ身なれば

和泉はこんなお返しをした。併しながら自分と云ふ女は何たる奇怪なことをする女であらうと和泉は熱い涙を零した。故宮から受けた御愛情の濃さが今更のやうに心に思はれて悲しかつた。あれまでにお思はれて居た自分がその肉身の御弟の宮と斯うしたことになつたかと思ふと、死に勝る刑罰を受けて居るやうに思はれた。また其處へ例の童侍が來た。宮のお手紙をま

た賜はるのかと思つた和泉は、さうで無いのに力を落した。そして自ら顧みて帥の宮を戀する心の深いことを認めずには居られなかつた。童の歸つて行く時に、

待たずしもかばかりこそはあらましを思ひもかけぬ今日の夕ぐれ

こんな歌を宮へおことづてした。宮は續いて逢ふことの出來ないために女の煩悶して居るのを哀れにお思ひになつた。宮の御家庭は温い所と思召すことが出來ないものであつて、夫人との御間は日に月に隔てのあるものになつて行くのをお感じになるのであるが、さすがに二夜も續けて外泊はなし難いことと宮は思つておいでになるのである。宮はまた兄宮の御一週忌の濟むまでは和泉との關係をせめて人の口の端にかけさせたくないと云ふことにもお心を支配されておいでになるのである。和泉に取つては餘り嬉しくも思はれないお志であると云はねばならない。

日の暮に和泉の所へ宮のお返しが來た。

ひたすらに待つとも云はばやすらはで行くべきものを妹が家路に

あなたの戀はそれ程であると思ふと、自分は煩悶しないでは居られない。
と云ふのである。

私は自分の心も戀も御説明申すことが出來ません。

かかれども覺束なくもおもほえずこれも昔の縁にこそあるらめ

併し心もそぞろになつて居りますこの者は、あなた様が慰めてお遣りにならなければならぬものだと思ひます。

和泉はまたこんな手紙を宮へお送りした。

宮は新しい情人に焦れておいでになりながらも、和泉をお訪ねになる喜びを續いてお得になることがむづかしかつた。三十日に和泉は、

郭公世にかくれたる忍び音をいつかは聞かん今日し過ぎなば

と云ふ歌を帥の宮家の例の童に託した。併しその日は伺候して来る人が後から後からとあつて、童はそれを宮に御覽に入れる機会が無かつた。翌日の早朝に童は漸く役を済ませた。

忍び音は苦しきものを郭公こだかき聲を今日よりは聞け

と云ふ宮のお返しがあつて、二三日してから和泉の所へおいでになつた。和泉は或寺へ参詣を思ひ立つて居たのでもあり、宮のおん志に恨めしさを持たないでもない所から、冷淡である
と宮がお思ひにならない程度のおもてなしをしてお歸ししようと思つたのであつた。つまり和泉は佛に託して戀をしない前の二人に歸らうとしたのであつた。

翌朝の宮のお手紙には、

自分のためには意外とも情けないとも云ひやうのない一夜であつた。

などと云ふ一節があつた。

いざやまたかかる思ひを知らぬかな逢ひても逢はで明くるものとは

と云ふ御歌もあつた。和泉の心はすっかりと折れてしまつた。併し御返事には、

世とともに物思ふ人は夜とても打解けて目の逢ふ時も無し

私にはいつもの事御座いました。

と皮肉なやうなことを書いた。

そのまた翌日、

今日はいよいよ参詣に出ますか。そして私の戀人は何時歸るの。

その間がまたどんなに長く思はれるでせう。

こんな宮のお手紙を和泉は得た。

折過ぎばさてもこそ止め五月雨の今宵あやめの根をや引かまし

こんな歌を宮へお送りして置いて、和泉は洛外の寺へ行つた。そして二三日の後に京の家へまた歸つた。宮から、

非常に逢ひたいのですが、何時かの夜のやうな恥をおかかせになつたものだから、臆病になつて家にじつとして居ます。あなたのせいであることにまで、あなたからは私の戀を疑はれることになるのでは無いかなどと思はれます。

つらけれど忘れやはする程経ればいと戀しきに今日は負けなん

併し私の愛の深さを、あなたは察せられるでせう。

こんなお手紙が来た。和泉は、

負くるとは見えぬものから玉かづら問ふ人すらも絶間がちにて

と御返事をした。

宮は例のやうな御微行で和泉の家へおいでになつた。女は失望することに馴らされて、戀しい宮のおいでをよもやと思つて心待ちもして居なかつた。それに參籠中の疲れも出てすつかりと寝入つて居たのであつた。侍女も誰一人門の叩かれる音に驚いて目を醒す者は無かつた。宮

は和泉の素行に就いて世間で云つて居る噂も御存じなのであるから、情人の一人が来て泊つて居るのであらうと推測遊ばして、その儘そつとお歸りになつた。

その翌日の宮のお手紙は、

開けざりし眞木の戸口に立ちながらつらき心のためしとぞ見し

戀の悲哀とはこんなものかと思ひましたよ。しみじみと我身が憐まれもしました。

と云ふのであつた。昨夜門まで宮のおいでになつたことを和泉はこれで初めて知つたのである。不用意に寝入つたことが口惜しく思はれた。

いかでかは眞木の板戸もさしながらつらき心の有り無しを見ん

無情な者と決めてお歸りになりました心も、皮を剝いで見て頂きたう御座いましたものを。

和泉はこんな御返事をした。宮はこの夜も和泉に逢ひに行きたく思召したが、侍臣の誰彼や乳母の諫めをお思ひになり、御兄の東宮や外戚の大臣への聞えをお憚りになつては、それもお

出来にならないのであつた。

雨續きの陰鬱な頃を和泉は帥の宮の御上ばかりを思つて暮した。然も悲しく終るべき戀として片時も其苦痛を思はないでは居られないのである。自分は世間で噂される通りの放縦を幾年かして來た女である。さうではあるが、今の自分は其頃の相手の誰一人にも戀を續けて居るのではない。自分は満身の愛を帥の宮にお捧げして居るのである。處女の戀に少しも變らない全い心を捧げて居るのである。併しそんなことは世間で認めてくれるものでもなければ、宮にも理解して頂けることでもない。和泉ははかなまれるのであつた。宮から、徒然な雨の日をどうして暮して居ますか、

大方にさみだるとや思ふらん君戀ひわたる今日のながめを

こんなお手紙が來た。自分の戀の心が通じたのかと和泉は身に沁んで嬉しく思はれた。

忍ぶらんものとも知らずおのが唯だ身を知る雨と思ひけるかな。

こんな返歌を書いて、もう一枚の紙にまた、

ふれば世にいとど憂身の知らるるを今日のながめに水まさらん

何時お目にかかれるのでせう。

と書いた。宮から折返して、

何せんに身さへ捨てんと思ふらん天の下には君のみや經る

思ふやうにならないのが人の世である。あなたのためにも自分のためにも。

こんなお手紙が來た。

五月六日になつた。雨はまだ止まない。此前に和泉の書いた手紙を哀れに御覽になつた宮は大降りのした夜が明けると直ぐ、

いかばかりの心細き思ひをして夜を明し給ひけん、恐しき雨、疎ましき雨にて候ひし。

などと云ふ真心の籠つた手紙をお送りになつた。

夜もすがら何事をかは思ひつる窓打つ雨の音を聞きつつ

君に思はれ参らせてある身ぞとは思ひ知らぬにても無き私ながら、怪しきまで心細く候。
和泉からのこの返事を御覽になつた、宮はまた、

われもさぞ思ひやりつる雨の音をさせるつまなき宿はいかにと

と云ふ歌をお送りになつた。晝頃に加茂川が増水したと洛中の人人が騒ぎ出した。宮も加茂川を見においでになつた。そしてお歸りになつてから、

私は今水の出た川を見て歸つた所です。あなたはどんな思ひで居ますか。

大水の岸つきたるに比べれど深き心は猶ぞまされる

解つて居てくれるか、どうだか。

こんなお手紙を和泉へお送りになつた。

今はよもきしもせじかし大水の深き心は川と見せつつ

お言葉ばかりでは仕方が御座いませんのね。

和泉はかうお返しを書いた。宮が和泉の處へおいでにならうとして、薫物の火入などをお取り寄せになつて、お身仕度をしておいでになる處へ、侍従の乳母が出て來た。

「何方へお出かけになるので御座いますか。私はそのお出掛け先をよく心得て居ります。何程の身分も持ちませんあの女を御寵愛遊ばしたく思召すので御座いますなら、何故此方へ呼んでお召使ひにならないので御座いますか。あのやうな階級の女のために輕輕しい御微行を遊ばしますのは何事で御座います。その中でもあの人は幾人も男を持つて居る女で御座います。さう云ふ男どもの嫉妬からどんな御災難にお逢ひになるかも知れません。全體こんなことは皆あの右近の尉がおさせ申しますことに違ひ御座いません。彈正の宮様のお不身持のお手引をいたしましたのもあの右近の尉で御座います。宮様、よく思召して御覽遊ばしまし。夜夜中にお出歩きになりました、それから好いことが湧いて参りませうか。お供を

する者などは直ぐ關白様へ、何處其處へかうかうと申すに違ひ御座いません。世の中は何時どう變動するかも知れないと云ふことをよくお心に入れてお置き遊ばしまし。皇儲の御位をあなた様は御自身とは遙かな所にあるものと思召しますか。御祖父の入道様はあなた様がお可愛くてならなかつたので御座います。今の關白様などと云ふ御子息方にどんな御遺言をなすつたと思召しますか。私は申し上げます、御運命の白黒がもう少しはつきりいたしますまでのあなた様は飽くまでお謹み深くおいで遊ばさなければいけません。」

と乳母は情理を盡して申し上げるのであつた。

「私は何處へも行かうとはしてやしないよ。おまへの心配して居ることは餘り大き過ぎるよ。私は閑暇なものだから面白い女と一寸した關係を作つて居るまでなんだよ。人にかれこれと噂をされる程のことでも何でも無い。」

宮はかうお云ひになつたのであるが、この戀を假にも卑しくして見ることは堪へ難いことであると思召した。自分が認めて居る和泉はともかくも女として立派な人間であるから、實際手許へ呼んで置いたらいいかも知れないと宮はお思ひになつたが、さうしたらまたどんなに針小

棒大な噂が自分達二人から生れるかも知れないと疎ましくも思召されるのであつた。かうしてまた宮は和泉を御覽になれ無い日ばかりをお送りになつた。

宮は漸く或日に和泉の處へおいでになつた。

「こんな長くよう來ないで居ることを私の本心からして居ると思つてはいけないよ。私の戀をこんなものと思つてくれては困る。併し罪はあなたの方にもあるのだと私は思ふ。私とあなたとの關係から私を恨んで居る人が幾人もあるつてね。あなたの所へ來るのをその口實で止められるのが私には一番辛いんだよ。私はさうで無くてさへも忍んで人の所へ出て來ることの困難な人間なんだからね、一層氣が使はれるのだよ。さうしてあなたに淋しい恨めしい思ひばかりをさせることにもなるんだよ。」

などと宮はしみじみとお話しになつた。

「さあ、これから一緒に出掛けないか、誰も居ない處へ今夜だけあなたを伴れて行つて、氣長に話でもしようかと思ふ。どうです。」

とお云ひになつて、宮は車を直ぐ縁へお寄せさせになつた。和泉は考へる間もなく車上の人

になつてしまつた。併し途途和泉はこんなことも人に知れずに済むわけは無いなどと、いろいろな取越苦勞がされた。夜が非常に更けて居るために宮家の門を入つて行く車を咎める侍も無かつた。兩側の部屋部屋に人の住んで居ない廊へ態と宮は車をお附けさせになつた。

「月が明るくて危いことなんかは無いからお降りよ。」

と宮がお云ひになつたので、和泉は我れと我がすることを腑に落ちないやうに思ひながら車から降りた。

「誰方もいらつしやらない處なんで御座いますか。」

「さうだよ。これからは此處を逢ふ場所に決めて置かうね。あなたの處は誰か外の男が來やしないか、隠れて見てやしないかと始終氣が置かれて、落ちついて居ることが出來ないから。」
こんなことも宮はお言ひになつた。

夜明になつて車が廊へ呼ばれた。和泉は密かにそれに乘つて歸るのであつた。

「私が送つて行きたいのだが、そのうち明るくなるだらうから、歸つて來た時に何處かで泊つて來たのだと思はれてはつまらないからね。」

宮はかう云つておいでになつた。和泉は女としてあるまじい朝歸りを、人は何と思ふであらうと恥しくも苦しくも思はれたが、朝の薄明りの中の宮のお姿のお美しくかつたことを思つては、何も何も物の數とも思はれないのであつた。

宵毎に歸しはすれどいかでなほ曉起きは君になさせじ

初めて苦しい經驗をいたしました。

こんな手紙を和泉は宮へお上げした。

朝露の送る思ひに比ぶれば唯だに歸らん宵はまされり

苦しいなどと云ふことはお互ひの中に封じてしまひませう。今夜は方角塞りで私はともかくも家に居るものと皆から思はれて居るから幸なんです。屹度また迎ひに行きます。

和泉は宮のこんなお手紙を得た。和泉は宮のお云ひになることを嬉しいとは思ひながらも、かうしたことが習慣となつて續くのはいいことであるとも思はれなかつた。

宮は例の御微行の車でおいでになつた。宮は車の中から、
「早く、早く。」

と和泉の出るのをお促しになつた。女は侍女の手前を恥ぢながらも戀しい御方の傍へ行つた。行先は宮家の昨夜の細座敷であることは云ふまでもない。

夜明には時を告げた鶏を憎いものやうに宮は仰せになりながら、和泉を車に乗せて一所にお出になつた。途途宮は、

「私が迎へに行く時にはどんなことがあつても出て來ることにしてお置き。」

こんなことをお云ひになつた。

「始終は出て參れますかしら。」

と和泉は云つて居た。

宮はお歸りになつてから、

私は今朝啼いた鶏が恨めしかつたから殺しましたよ。見て御覽。

殺しても猶飽かぬかな寝ぬ鶏の折ふし知らぬ今朝の初聲

これを其鶏の羽へ書いて和泉へお送りになつた。和泉は、

いかがとは我こそ思へあさなあさな啼き聞かせつる鶏を殺せば

可哀相で御座いますね。

と御返事を書いた。

二三日して月のよく澄んだ夜に、和泉は縁近く出て庭を眺めて居た。宮から、
月を見て居ますか。

わが如く思ひは出づや山の端の月にかけてつ歎く心を

こんなお手紙が來た。常にもまして和泉はこのお手紙を身に沁むやうに思つた。忍び場所で人に見られないかと月の明るいのを憚つたことが思ひ出されるのであつた。

一夜見し月ぞと思へど眺むれば心も行かず目は空にして

と云ふ返歌だけを和泉はお使に持たせて歸した後で、獨りつくづく月夜の景色に對して居た。そのうちに夜が明けた。

その翌夜、宮は和泉の家へおいでになつた。和泉は妹を別殿に住ませてあるので、その妹の處へ通つて來て居る情人の車が一つ庭に置かれてあつた。

「先客があるやうで御座います。車が一つ御座います。」

お供の一人が宮へかう申し上げた。

「ではいい、黙つて歸らう。」

と宮はお云ひになつた。人の噂通りなことをして居る女であると、宮はお心の中で和泉をお蔑みになつた。お口惜しさ、腹立たしさもお感じにならないわけには行かなかつた。併しまだ宮は和泉と別れやうとは思召さなかつた。翌日は手紙をお書きになつた。

昨夜私の行つたと云ふことだけは聞きましたか、其れにも氣が附く間が無かつたかも知れな

い、と斯う思ふ私の胸の中を察して下さい。

松山に浪高しとは見てしかど今日のながめはただならぬかな

これは雨の降る日のことである。和泉は誰かに中傷されたのではないかと思つた。

君をこそ末の松とは思ひつれひとしなみには誰か越ゆべき

とお返した。

宮は何時かの夜のことがお恨まれになつて、長く和泉へ消息をお遣はしにならなかつた。或日、

つらしともまた戀しともさまざまに思ふことこそ暇なかりけれ

こんな歌を一つだけお送りになつた。和泉は云ひたいことがあるのであるが、云ひわけがましいことをするのも恥しくて、唯だ、

逢ふことはとまれかくまれ歎かじを恨み絶えせぬ中となりせば

と云ふ一首をお返ししただけであつた。

それから後、宮のお手紙は稀稀にしか和泉へ送られなかつた。女は或月の晩に堪へ難い悲しさを覺えて、

月を見て荒れたる宿にながむとは見に來ぬまでも誰に告げよと

この歌を宮へ奉らうとした。使つて居る下童を呼んで、

「帥の宮様へ上つてね、右近の尉に渡しておいで。」

と云つて出して遣つた。

宮はお居間で伺候の公達などとお話をしておいでになつたが、その公達が歸つてから、右近の尉のさし上げた和泉の消息を御覽になつた。

「何時もの車の用意をさせてくれ。」

と宮は右近の尉へお命じになつた。

和泉はまだその儘月を眺めて居たのであつたが、庭へ人の入つて來る様子を見て御簾を下させた。宮のお姿はきらきらしい御装ひでも無く、御平常著の柔かな直衣であつた。それがどんなにお美くしいお顔にうつりよく思はれたか知れない。宮は何ともお言葉をお掛けにならずにお供の一人に扇の上へ載せたお文を御簾からお入れさせになつた。

「お使が直ぐ歸つたものですから。」

とその男は云つた。和泉は奥の方へ身を引いて居たのであるが、此方も扇でお文を引き寄せ取つた。宮は上へお上りにならうと云ふ思召らしい。植込の草花の中を彼方此方とお歩きになりながら身に沁む古歌などを口誦みになつた。

宮は縁へお上りになつて、

「今夜は歸るよ。そつと來たつもりだつたけれども、こんな月夜には隠れおほせないからね。

それに私は明日が謹慎日なのだから家に居ないではいけないからね。」

と云つて、直ぐお立ちにならうとした。和泉は悲しさに、

こころみに雨も降らなん宿過ぎて空行く月の影や留ると

こんな歌を申し上げた。この女は人の云ふやうな擦れからしでも何でも無い、自分を思ふ上に極めて純粹な分子があると宮は哀れにお思ひになつた。

「やつぱり私のあなただ。」

かうお云ひになつて、宮は和泉の手をお取りになつた。

あぢきなく雲井の月に誘はれて影こそ出づれ心やは行く

この歌をお囁きになつて宮のお歸りになつた後で、女はまた御簾を上げさせた。それは月のひかりで先刻の文を読むためであつた。

我ゆゑに月を眺むと告げつればまことかと思ひに出でて來にけり

と書かれてあつた。自分を怪しからぬ女であると思召した宮のお疑ひはもう解けたのである

と、和泉は嬉しく思つた。

宮も相手にしがひのある女と認めておいでになる處から、情人の一人として何時までも愛しようと思つておいでになつた。併し戀人同志の中の平和は極めて短い時の間より無かつた。

「此頃和泉は源少將と關係をして居るさうで御座います。少將は晝間通つて行くさうで御座います。」

こんなことを宮へ申し上げた人があつた。同じ席に居た一人は、

「あの女は兵部卿の情婦でもあるのです。」

と申し上げた。宮はまた浮氣女を疎ましく思召して久しくお音信を遊ばさなかつた。

和泉の家へ例の童侍が遊びに來た。和泉の使つて居る下童とは仲が好いのでいろいろな話をし合つた。

「宮様のお手紙を持つて來たの。」

「いいや、何時か宮様のおいでになつた時に、前から來て居た車があつたのでね、それでねそれからお手紙なんかもお出しにならないのだよ。誰か外から通つて來る人があるのだと

おかんづきになつたのだつて。」

童侍はこんなことを喋つて歸つた。その話は直ぐ和泉の耳へ入つた。捨てられたと云つても、もともと良人とお思ひした仲でも無し、物質的の保護を受けなければならぬ自分でも無いから、みじめな人になつた譯では無いが、それは表面のことで、自分の心は時時の宮の御消息を糧にして唯だ生きて居たのに違ひないのを、それを奪はれたことは苦痛とも何とも云ひやうのないことである。然も現在の自分には覺えのないことが原因になつて居るのであると思ふと、和泉は悲しくて悲しくてならなかつた。そのうち宮からお手紙が來た。

少し病氣をして居ましたから御無沙汰になつて居ます。何時か行つたのですが、その時もまた差し合ひがあつて歸つて來ました。そんな時時の私の失望を察して下さい。どんなに自分が憐まれるでせう、一人前の人間らしく無いとも思はれるのです。

よしやよし今は恨みじ磯に出でて漕ぎ離れ行く蟹の小舟を

和泉は次のやうな返事を書いた。

あさましい噂を信じておいで遊ばすのですから、その私が何を申しましても唯唯嘲笑の種にならんとより思はれません。私はそれが悲しくてもう永遠にお手紙はさし上げない積りで御座いますが、今度だけはと存じましてこれを書きました。

袖の浦に唯だ我が焼くと鹽たれて船流したる蟹とこそなれ

七月になつた。七日には和泉のいはゆる男の友人から心をそそるやうな歌や手紙が澤山來た。併し今の和泉の心はその中のどれにも動かなかつた。前に帥の宮はこんな日などによくお音信を遊ばしたのであるが、それがばつたりと止んでしまつたと云ふことばかりを和泉は歎かはしく思つて居た。其處へ丁度宮のお手紙が來た。

思ひきや棚機つ女に身をなして天の河原を眺むべしとは

と云ふお歌だけであつたが、やはり思ひ出して頂けたのである、宮は自分をお忘れにならなかつたのであると和泉は喜んだ。

眺むらん空をだに見ず七夕にあまるばかりの我身と思へば

宮はこの返歌を御覽になつた時、自分には到底捨てられない女であると思召した。月末になつてから、宮は、

時時は私をも情人の一人だと思つて音信をして下さい。

こんなことを和泉へ云つておよこしになつた。

寢覺めねば聞かぬなるらん萩風は吹かざらめやは秋の夜な夜な

女はかう御返事をした。宮は折返して、

萩風は吹かばいも寢で今よりぞ驚かすかと聞くべかりける

と云ふ歌をお遣しになつた。そして二三日経つた夕方に俄に宮のお車が和泉の家へ附けられた。まだこれ程明るい時にはお逢ひしたことが無いので、和泉は恥しく思つた。

それからまたふつつりと宮の御消息が無かつた。和泉は自身の衰へやうとする容色を悲んだ。

つれづれと秋の日頃の経るままに思ひ知らせぬ怪しかりしも

よくよく思ひ知り候。御心の中も、はた我身のなれる果も。

こんな手紙を和泉は宮へ差上げた。

また逢ひによう行かないことになりましたが、心は、

人はいざわれは忘れず日を経れど秋の夕ぐれありし逢ふこと

こんなものです。

と云ふ宮の御返事を眺めながら、かうした戀を唯だ生命にして日を送つて居る自分と云ふもの程頼りない者はあるまいなどと思つた。はかない生涯であると思つた。定つた良人と云ふ者も無く、將來に何が待つて居るとも思はれない自身をあさましくも感じた。

八月になつた。和泉は無聊な心を慰めるために近江の石山寺に參籠しようと思つて家を出た。

宮は和泉へ久しく消息を遊ばさなかつたことをお思ひ出しになつて手紙をお書きになつた。例の童侍を召して使ひに行くことをお命じになつたが、

「私はこの間一寸寄つて見ましたので御座いますが、あのお方はお留守で御座いました。石山へおいでになつたさうで御座います。」

と童は取次ぐ侍女に云つた。

「さうか。では今日はもう日が暮れて居るから、明日早く石山まで行け。」

宮はかう重ねてお命じになつた。

童侍が翌日石山へ來た。和泉は參籠して居ながらも京の家ばかりが戀しかつた。初めの通りに帥の宮に愛されて居たなら、自分はこの石山までさまよつて來るやうな心にはならなかつたであらうなどとばかり思はれた。それに就けてまた佛に祈誓も多く掛けられた。堂の外を和泉が眺めて居ると高欄の處へ人が出て來た。それが宮家の童であつた。女の胸は轟いた。

「何をしに來たの。」

と和泉は侍女に問はせた。童から得た手紙を和泉は常よりも急いで封を切つた。

結構な思ひ立ちでしたね。けれど何故行くと云ふことだけ位私に云つてくれなかつたのですか。佛の道を一心に進んで行く妨げになるまでは固よりあなたに思はれて居る筈はありませんが、せめて寺へ行くことだけでも報せて置いて欲しかつたと思ひます。

關越えて今日ぞ問ふとや人は知る思ひ絶えせぬ心づかひを

何時歸りますか。

近い處に居る時にも稀なお手紙を、かうした遠い處で得た和泉は嬉しく思はないで居られなかつた。

近江路は忘れぬめりと見し程に關うち越えて問ふ人は誰

寺を出ます日を初めから決めて來なかつたものですから、只今の所ではまだ何時まで居りますとも確かなことは申し上げられません。

山ながら海は漕ぐとも都へは何か打出の濱は見るべき

この和泉の返事を御覽になつた宮は、

「苦しいだらうが辛抱してもう一度石山へ行け。」

と童に仰せになつて、またお手紙をお書きになつた。

私の方に疚しい所があるとは云ふものの、あまりに物足りない返事ではありませんか。

尋ねゆく逢阪山のかひもなくおぼめくばかり忘るべしやは

何時も私は、

憂きにより磯屋ごもりと思ふとも近江の海はうち出でて見よ

こんなことを云つてあなたを慰めなければならぬのですね、全く。

和泉は言葉を多く書かずに、

關山のせきとめられぬ涙こそ近江の海と流れ出づらん

と云ふ歌をお返しに書いた。そしてまた端に、

「こころみよおのが心も試みんいざ都へと来て誘ひ見よ

とも書いた。

宮は石山まで和泉を迎へにお行きになることなどは夢想も遊ばさないことであつたが、かう云はれて見れば行かねばならないであらうかなどと心を迷はしておいでになつた。そのうち和泉は京へ歸つた。

試みに迎へに来るがいと、あなたは面白い問題を私に出してくれましたが、急にお歸りになつたと云ふから、その問題も無駄になつてしまひました。

あさましや法の山路に入り初めて都へいざと誰さそひけん

宮から斯う和泉へ云つておよこしになつた。御返事に和泉は唯だ、

山を出でてくらき道にぞたどりにし今一度の逢ふことにより

とだけ申し上げた。月末になつて野分めく風が荒く吹く雨の日に、和泉が平生よりも心細い思ひをして居る處へ、宮からお手紙があつた。この折をよくお察しになつたお志が嬉しくて、和泉は積る恨めしさをも捨てたくなつた。

歎きつつ秋の御空を眺むれば雲うち騒ぎ風ぞ烈しき

これは宮からのお歌である。御かへし、

秋風はけしき吹くだに戀しきにかき曇る日は言ふかたぞ無き

實感であらうと、宮はこの歌を哀れにお思ひになつた。併し逢ひにお行きになることは周囲の御事情が許さなかつた。

九月の十日過ぎの明方近い宮のお寢醒め心に和泉のことがお思はれになつた。長く長く訪はないで居るが、この有明月を見て居るであらうとお思ひになると、何事はあつても行かねばならぬと云ふやうなお氣持におなりになつた。宮は例の童侍一人を供にお伴れになつて和泉の家の門へお立ちになつた。

門の叩かれる音がする。和泉はその前から目を覺していろいろの物思ひに囚はれて居たのであつた。秋と云ふ時のためにか分けてこの頃は毎日物思ひが仕續けられた。門の音を、今頃誰であらうと和泉は思つた。直ぐ前に寝て居た女を起して用を聞かせようとするのであつたが、急に眠から覺めてくれない。やうやう起きた女はまた侍を呼びに行つた。侍達もその中に起きたが、うろろうとして居るばかりで、氣を利せて門へ出で見る者も無い。門の音はもう止んでしまつた。客は歸つたらしい。皆が眠つて居ると思つて、いぎたない香氣な家であると思つたであらうと和泉は思つた。自分のやうに今頃よう眠らないで居る人があつたのであらうか、誰であつたのであらうと思つて居た。漸く門を開けた侍は外に人の居ないのを見て、

「かなはない、夜だけでももう少し落ちついて居て欲しいものだ。がさがさとしたこの邸の

お付きさん達だ。ありもしない音を聞いて門を開けよなどと仰つしやる。」
 などとつぶやいて居た。和泉はその儘起きて居た。霧の深い空を眺めて居るうちに少し明るくもなつて来たので、この夜明の心持ちを散文に書いて居る所へ宮からお手紙が来た。

秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて歸りにしかな

と云ふお歌だけである。やはり宮でおありになつたのである、どんなに風流氣のない自分だと思ひになつたであらうと、和泉は思ふのであつたが、この夜明の身に沁む氣色を、自分と云ふものと關聯のあるものとして宮がお味ひになつたと云ふことが何よりも嬉しく思はれた。和泉は手習ひのやうにして書いて居た文章をお返しの手紙のやうに疊んで宮へお上げた。風の音が強くて、木の葉は一つも残るまいと思はれる朝である。恐ろしいほど黒い雲が出ると思つたが、雨は唯だほんのばらばらと降つただけで止んだ。これも心に哀れを添へるものと自分は思つた。

秋のうちに朽ちはてぬべしことわりの時雨に誰か袖を假らまし

こんな歌を一人で考へて居た。草の色も大木の梢の色も自分の戀人の心に似て今は變つて行きさうである。續く時雨に逢つた後の景色も哀れに想像された。こんな自然に對しても自分は悲しいことばかりが思はれてその儘縁近い所で横になつて居た。自分はこの先もう生きて居られるかどうかと云ふやうな心細い思ひもされて、自分と云ふものの運命を悲しまずにも居られなかつた。上の空を雁が幽かに啼いて通つた。世間の人は皆自分のやうな感傷的な氣分にならないで居られるのであらうかと堪へ難く思つた。

まどろまであはれ幾夜になりぬらん唯だかりがねを聞くわざにして

起きてしまはうと思つて妻戸を押し開けた。西に傾いた月が遠く空に懸つて、霧の降る中に鐘の音と鶏の聲が交つて響く。自分はこんな身に沁む景色に逢つたことは無い、これからも無いであらうと思つた。袖は涙で冷たくなつて居た。

我ならぬ人もさぞ見ん長月の有明の月に如かじ哀れは

今この門を叩く人があつたなら、どんなに身を沁んで思はれるであらうとも自分は思つた。戀人を傍にしないで唯だ一人かうして自然と向ひ合つて居るのは自分だけであらうと云ふやうな氣もするのであつた。

よそにても同じ心に有明の月を見るやと誰れに問はまし

この歌は宮へお上げしたいと自分は思つた。

これが其文章である。門までおいでになつたと云ふことを知つて和泉はこれをお上げしたのであつた。宮はこの返事に歌をまたお遣しになつた。その使の來た頃にも和泉はまだ外の景色を眺めたままで居た。

秋のうちは朽ちけるものを人もさはわが袖とのみ思ひけるかな

われならぬ人も有明の空をのみ同じ心にながめけるかな

外にても君許りこそ月は見めと思ひて行きし今朝ぞ苦しき

外にまだ二首のお歌があつた。その後へ、

どうしてもあなたの家の門は開きませんでした。

と書かれてあつた。女は張合のある氣がして嬉しかつた。

月末になつて和泉の所へ宮からお手紙が來た。常に逢ひたく思ふと云ふやうなことが書かれて、それから

妙なことをあなたに云ふが、私に一寸した關係のあつた人が今度遠國へ行くことになつたのです。身に沁むやうなことを私は一言別れる女に云つて遣りたいのです。けれどそんな作は私に出來ない。あなたから貰ふものには何時もその魅力が満ちて居るから、それであなたに一首だけその代作を頼まうと思ふのです。是非承知して下さい。

こんなことも書かれてあつた。得意顔に御代作をすると云ふことも恥かしいことであると和

泉は躊躇されるのであるが、自分にはどうしましてなどと云つてお断りすることも悃口ぶつた女のすることであると思ふと、それも厭に思はれた。唯だ

これにて御心にかなひぬべきや否や覺束なく候へど、

惜まるる涙に影はとまらん心も知らず秋は行くとも

濃やかなる御情を現はし候ことを私にせよと望ませらるるは餘りの御無情に候。

かう和泉は書いた。またその端に、

君を置きていづち行くらん我だにもうき世の中に強ひてこそ經れ

と云ふ歌をも書いた。

宮から、

代作に満足しましたと云ふだけでいいでせう。自分の思想をよくああまでに現はしてくれたなどと云ふ禮の言葉をあなたに受取らせようとは思ひません。

うち棄てて旅行く人はさもあらばあれまたなきものに君し思はば

私は代作に満足し、そしてまたあなたの戀に満足して居ます。

と云つておよこしになつた。

十月になつた。十日過ぎに宮は和泉の所へおいでになつた。奥は餘り暗くて恐しい氣がする
と仰せになつて、宮は縁近い座敷で女とお語りになつた。宮のお口からは情に富んだ御言葉が
多く出た。外を見ると月のある空が曇つて時雨が通つて行くのであつた。わざわざ作つたやう
な背景であると女は思つた。昨日までの歎き、現在の歡樂、未來の不安などを思ふ時、和泉は
心が寒くなつて慄はれた。この戀に身も生命も忘れて居る女の様子を宮は御覽になつて、この
人は何故多くの敵を持つて居るのであらう、どう云ふわけで無實な噂を立てられる人なのであ
らうと哀れにお思ひになつた。眠つたやうにしてじつと考へ込んで居る和泉の肩をお揺りにな
つて、

時雨にも露にもあらで寝たる夜は怪しく濡るる手枕の袖

と云ふ歌をお囁きになつた。和泉は胸が充満になつて御返事が出来ないのであつた。月影に女の顔の涙ばかりが光つて見えた。宮はじつとそれを御覽になつた。

「何故返辭をしてくれないの、私と云ふものが癩に障るの。」
とお云ひになつた。

「私はね、どうしたので御座いませう。胸が無茶に掻き亂されて苦しくて苦しくてならないので御座いますよ。仰つしやいますことだけは耳に聞えますけれど。」

女はまた少し微笑んで、

「ねえ、覚えていらしつてくださいな、私はね、手枕の袖とお言ひになりました今晚のお歌を何時までもよう忘れないで居りますよ。」

と云つた。惜しい夜が明けて宮はお歸りになつた。宮から今朝の気分はどうかと直ぐ尋ねておよこしになつた。その御返事を和泉は、

今朝の間に今は干ぬらん夢ばかり寝ると見えつる手枕の袖

とした。忘れまいと女の云つた手枕の袖と云ふ句のあるのに宮は微笑みになつた。

夢ばかり涙に濡ると見つらめど乾しぞかねつる手枕の袖

昨夜程哀れな秋の夜は無かつたやうに自分の思つたのは所がらでせうか。

宮はまたこんな手紙をお送りになつた。

宮はそれからしげしげと和泉の所へお通ひになるやうになつた。和泉の性格も次第に御理解がお出来になるやうになつた。この女は決して世間で云ふやうな人擦れし切つた女でも無い、男を弄ぶと云ふ種類の女でもない。唯だ氣の弱い一方の女である、過失があるなら其れは皆感傷的な性情から起つたことに違ひないと、宮はお點頭きになるのであつた。宮はこの戀を遠い未來へかけて變へまいと常に和泉にお云ひになつた。

「かうしてあなたを一人置いて置くことは私に取つて忍ばれないことだ。私も心だけでは毎

日でも来て居たいが、さうもならないからね、だからね、思ひ切つて私の處へ来てはどうだらう。あなたが世間からいろんな事を云はれる原因も、つまり獨身で氣儘な生活をして居るからなんだ。それが好くないんだ。私は人の云ふやうなあなたの友人が出入りして居るのは一度も見たことは無いがね、それは私が始終来て居ないからかも知れないけれど。とにかくあなたは實際以上の不愉快な噂を持つて居る氣の毒な人なんだ。それからね、何時も此家を出て行く時、あなたのことが氣に懸つて悲しく思はれてならないのも、あなたが一人ぼつちの人だからだと思ふ。私をのろい男だからと人が思ふかも知れないけれどね。さうなんだよ。私だつてかうして逢ひに来ることは何時第三者の爲に遮られることかも知れないのだからね。あなたが何時も零して居るやうな心細さを眞實に感じるのなら、二人の爲にその決心をしてはどうだらう。私の處には多勢の女達も居るけれど、あなたは別段氣兼ねするほどのことも無いだらうと思はれる。私と云ふものが大體女に思はれる縁の少ない人間だから、女達の部屋へ入り込んで居るやうなことはあなたが見ようと思つても見られ無いことだよ。私は自分一人で何時も淋しい顔をして佛勤めなんかばかりして居るのだよ。だからあなたが傍へ來

て居てくれて、毎日趣味の合ふ話などをして居たらどんなに楽しからうと思ふのだよ。」かう宮は和泉へお云ひになつた。和泉は宮のお言葉に道理が多いと思はずには居られなかつた。處女でも無く人の妻でも無い自分にさまざまな風評の集つて來るのは當然のことである。自分は何時も光の無い世界のやうな生活をして居るのである。自分はこの生活から離れる必要がある。今更に妾の名で若い貴人に引き取られて行くやうなこともしたくないと思ふが、已むを得ないことであらう。彈正の宮にお思はれて居た自分が御弟の帥の宮の所へ參つたと云ふことで世間の譏りは受けるであらうが、それも仕方がない、さう心を決めやうかと和泉は思つた。宮に夫人はおありになるが、それは別の御殿に住ませておありになるのであつて、お身の廻りのことなどは皆乳母がお世話を申して居るのだとも豫ねて知つて居る。それに就いての苦勞などは少い。また得意相に宮の侍妾として居るのでは無くて、自分は唯だ陰に隠れて置いて頂かうと思つて居るだけであるから、それ程憎まれなくても濟むであらうと和泉は將來のことが思はれた。獨身の生活のために自然だらしく男と關係するとお云ひになる宮の御解釋は、云ひわけをしないで置く方がいいであらうと思つた。

「一人ぼつちの者の必ず受けなければならぬ運命に甘んじて居ましてね、唯だあなたが偶において下さいますことだけを光明のやうに思つて暮して居たんで御座いますよ。あなたがこの境遇から私を救ひ出してやらうと思召しますなら、私は喜んでお手にすがりますわ。けれど私との關係が今までのやうに陰のことになつて居ましても随分御批難をお受け遊ばすのですから、私がいよいよお邸へ入つて参りましたら、その聲が一層高くなりはいませんか、それが心配で御座います。」

と和泉は云つた。

「いろんなことは云はれるだらうが、それは私のことだ。あなたはさうなつたからと云つて困る目に逢ふことも無いだらう。人から侮蔑される譯も無いでは無いか。そのうちあなたを住ます静かな處を拵へてから、またよく相談をしよう。」

などと宮は頼もしいことをお言ひになつた。そしてまだ夜のうちにお歸りになつた。女はその後で先刻の宮のお話に就いていろいろと思ひ亂れて居た。今の自分が宮のおいでを得ることが出来ないでも、それは人に笑はれることも無い唯事である。いよいよお邸へ入つてから何程

の御愛も得られない日送りをする事になつたらどんなにか恥かしく思はれるであらうなどと思ふのであつた。そのうちにお手紙が來た。

露むすぶ道のまにまに朝ぼらけ濡れてぞ來つる手枕の袖

女は手枕と云ふ文字を嬉しく思つた。

道芝の露とおきぬる人よりも我手まくらの袖は乾かず

これは返歌である。

その翌晩の月もよく澄んで明るかつた。宮は早く和泉の家をお出になつたために、邸へお歸りになつてから月をお眺めになつた時間の方が長かつた。そしてまだ早朝のうちに手紙を和泉へ遣はさうと思召した。例の童侍がまだ起きて來ぬかと、そのために人へお尋ねになつた。

和泉も霜の白い夜明の景色に驚いて文を書いた。

手枕の袖にも霜は置きけるを今朝うち見れば白妙にして

宮は先を越されたやうにお思ひになつて苦笑を遊ばした。

妻戀ふとおきあかしつる霜なれば

と云ふ句が御口に上つた。其處へ童が出て參つた。

「いけない、早く使に行かなければならない用があつたのだ。」

宮は御機嫌の悪い御様子で、和泉への手紙をお渡しになつた。

童は飛ぶやうにして出て行つた。

「此方からのお使の參らないうちお召しになつて居たのですが、私がぐずぐずとして居まして遅れましたものですから、宮様は大變御機嫌が悪う御座いました。」

こんなことを云ひながら童は宮のお手紙を出した。

昨夜の月は明るかつたですね。

寝ぬる夜の月は見るやと今朝はしも起き居て待てど間ふ人も無し

いかにも自分の手紙の返事としてお書きになつたものでは無いと和泉は思つた。

まどろまで一夜ながめし月見れど起きながらしも明かし顔なる

と書いて、和泉はその後へ童を取成すつもりで

霜の上に朝日さすなり今ははやうち解けにたるけしき見せなん

小さい子が大變しよげて居ります。

とも書いた。これに對して、

今朝のあなたのしたり顔を思ふと腹が立つてならない。童を何時かの鶏のやうに殺してやりたいとさへ私は思ふ。

朝日さし今は消ゆべき霜なれどうち解けがたき空のけしきぞ

こんな宮のお手紙がまた来た。

どうやら童はお殺しになつたものらしい御座いますね。

君は来ずたまたま見ゆる童をばいけとも今は云はじと思ふか

宮は和泉のこの手紙を見てお笑ひになつた。

ことわりや今は殺さじこの童忍びの妻の云ふことにより

あなたは手枕の袖を忘れたの。

こんな手紙をまたお書きになつた。

和泉作

人知れぬ心にかけて忍ぶをば忘るとや思ふ手枕の袖

宮のおかへし、

物も云はで止みなましかばかけてだに思ひ出ましや手枕の袖

やつぱり忘れずに居ましたね。

和泉の所へまた二三日宮から何のお音信もない。頼もしいあの御相談はどうなつたのであらうと思つて、女は夜も寝られない程心ばかりが使はれるのであつた。目を覺したまま床に居てやつと夜が明けたかと嬉しく思ふ頃に門を叩く音がした。今頃何が起つたのであらうと思ひながら人を起して出すと、それは宮からのお文使であつた。今頃どうしてこれをお書きになるお心におなりになつたのであらう、自分の心が通じたのかも知れないなどと、身に沁んで和泉は思つた。妻戸が開けられて、月の光で手紙は讀まれた。

見るや君小夜うち更けて山の端にくまなく澄める秋の夜の月

こんなお歌であつた。門は開けないで唯だお手紙だけを取り入れさせたのであるから、使を

外で長く待たせることは氣の毒であると思つて、和泉は直ぐにお返しを書いた。

更けぬらんと思ふものから寝られねどなかなか月は見ず

宮はこれを御覽になつて、同じ所に居て始終この女に素早い歌の唱和などをさせて見たら面白いであらうと、この前の御計畫を事實にする方法をお考へになつた。

それから二日程して宮は女の乗つた車のやうに外見をした車に召して和泉の處へおいでになつた。晝間お目にかかるのはこれが初めてであるので女はどぎまぎした。隠れてしまふやうな初心な事も出来ない、また飽くまで打解けた戀仲と宮の信じておいでになることにも背くことになるからなどと心を引き立てて和泉は宮をお迎へした。

お通ひの途絶えた間のお心持などを人懐かしい御様子で宮は女に語つてお聞かせになつた。

「この間話したやうにすることを早くお決めよ。私は斯うして隠れて來るのをきまり悪くも恥しくも思つて居るのだよ。さうかと云つて來ないでは生きがひもない氣がするのだから、ねえ厭だねえ、世の中は。どうかして苦勞をせめて少くしようぢやないかねえ、お互ひに。」

「私はもう何時でもお邸へ參るつもりで居るんで御座いますよ。けれど、またね、參つてからあなたのお心の冷たさに泣くやうなことがあるはしないかと、それが心配になつてまゐりましたの。」

「まあ試して御覽、私の愛がどれ程のものであるかをさ。」

こんな言葉が交換された。宮は近い透垣の傍の檀の木少し紅葉したのを欄干にもたれてお眺めになりながら、

ことの葉深くなりけるかな

こんなことをお口誦みのやうに仰せになつた。

白露のはかなく置くと見し程に

と云ふ和泉を宮はやはり趣味の女であると嬉しく思召した。宮は非常にお美くしい。お召物は直衣であるが、下へお襲ねになつた物の色などの美しくさは、男は斯うでなければならな

いと見惚れられるばかりでおありになつた。和泉は自分の本質は人の云ふ通りに浮氣なのかも知れない、今宮をお眺めして恍惚として居る自分の目そのものは確かに浮氣な氣に富んだものであると思つた。

翌日宮のお手紙が來た。

昨日のあなたが餘りきまりを悪がつて恥しさうにばかりして居たのを自分は物足りなく思ひましたよ。けれどまた、あなたの心の中を哀れにも感ぜられました。つまり私を思つてくれるからだと思つたから。

和泉は、

葛城の神もさこそは思ひけめ久米路にわたすはしたなきまでどんなに苦しい思ひをしましたでせう。

と御返事を書いた。宮からまた折かへして、

行ひのしるしもあらば葛城のはしたなしとてさてや止みなん

と云ふ歌が送られた。

宮のおいでになる日が多くなつたので、和泉の物思ひが少くなつた。併し一方では昔の馴染の男などから來る手紙も多いし、その人達の訪ねて來たりすることも少くないのを和泉は苦しく思つて居た。早く宮のお邸へ入つたならこの苦痛だけは免れられるであらうと思ふのであるが、側目も振らずにその目的にばかり進んで行くことも出来なかつた。或霜の白い朝、

わが上は千鳥も點けじ大鳥の羽にも霜はさやは置きける

と云ふ歌を和泉は宮へお送りした。

月も見で寝にきと云ひし人の上に置きしもせじを大とりのごと

こんな返歌をお遣しになつて置いて、その日の暮に宮はおいでになつた。

「今は郊外の紅葉の見頃だらうね、西山邊がいいだらうと思ふよ。何時か一所に行つて見ようぢやないか。」

と宮はお云ひになつた。

「お供いたしますとも。嬉しう御座います。」

と和泉は云つた。

紅葉見をお約束遊ばされた日に、宮から和泉の所へ、

突然謹慎日に出くはしたのです。今日の約束を反古にするのが残念でなりません。屹度この次に決めた日には一所に行きませう。

と云つておよこしになつた。その晩は丁度大雨になり、風も混つて、木に一枚の葉も残すまいとするやうに荒れ狂つた。昨日山へ行くことの出来なかつたことばかりを和泉は残念に思つて夜を明した。朝早く宮から、

神無月世にふりにたる時雨とや今日のながめを飽かず見るらん

また残念にも思はれます。

と云ふお手紙が来た。和泉は、

時雨かも何に濡れたる袂とさだめかねてぞ我も眺むる

仰せの通り、

もみぢ葉は夜半の時雨にあらじかし昨日山邊を見たらましかば

とも存じて居ります。

宮はまた、

そよそよなどて山邊を見ざりけん今朝は悔ゆれど何のかひ無し

あらじとは思ふものからもみぢ葉の散りや残れるいざ訪ね見ん

と云つてお遣しになつた。

うつろはぬときはの山も紅葉せばいざかし行きてのどどと見ん

どんなに滑稽で御座いませう。
和泉が斯う申したのに對して、

山邊には車に乗りて行くべきを高瀬の舟はいかが寄るべき

と宮は云つておよこしになつた。これは何時か宮のおいでになつた時に、和泉が障りがあつてようお目にかからないとお断りして、それからまた、

高瀬舟はや漕ぎいでよさはるとてさし歸りにし蘆間わけたり

こんな歌をお送りしたりしたことがあるからである。

もみぢ葉の見に来るまでも散らざらば高瀬の舟のいかががこれん

とまた和泉から書き送られた。その日の暮に宮はおいでになつたが、和泉の家が今日は方角塞がりになつて居るために、此處でお泊りになることは出来ないであつた。宮はまた和泉を

そつと車へ乗せてお出になつた。宮はこの頃方違へにお従弟の三位中将憲定の家においでになるのである。

「お邸でも御座いませぬ所へ、私をお伴れ遊ばすことは眞實にあなた様のためにお宜しう御座いませぬわ。」

と和泉は云つて居るのであつた。宮は和泉を車の儘で人氣のない車置へお置きになつて家へお入りになつた。和泉は恐ろしさに慄えて居た。宮は人人の寢靜まるのを待つて車置へおいでになつた。不思議に思ふらしい宿直の侍などは、車置に目を附けながら頻りに夜廻りをして歩いた。例の右近の尉と童とが車の番をして居るのであつた。宮はこの日のこの時程戀の高潮に達したことは無いやうにお感じになつた。夜明前にまた和泉をその家へお送りになつた。

「誰も起きない間に邸へ入らなければならぬから。」
と仰せになつて直ぐお歸りになつた。朝になつて宮から、

寝ぬる夜の寢覺の夢ならひてぞ伏見の里を今朝は起きつる

こんなお歌が来た。和泉のかへし、

その夜よりわが身の上は知らねばすずろにあらぬ旅寝をぞする

和泉は宮のお邸へ入ることに心を決めた。宮の厚いお志に酬いたいと云ふ要求が内心から湧いたのである。和泉へのこのことに就いて親切な忠告をする人達も無いではなかつたが、和泉はそれに耳を借さうとはしなかつた。数奇な運命を持つて居る自分なのであるから、強ひて其れに抵抗して行く必要がないと和泉は思つて居るのである。堅實な人になる心がけを學ぶ必要もないと思つて居るのである。併しともかくも自分は人の奉公人になるのであるが、今更に何故そんな氣になれるのであらうと自身の心が怪しく思はれないでもなかつた。自分の心は塵介を離れた岩の中などへこそ入つて行きたいのでは無いかと思はないでも無かつた。さうした上で悲しい目を見ることになつたらどうであらう。世間からは思慮のない女だと笑はれるに違ひない、やはりこの儘で居る方がいいのではあるまいか、親や兄弟と往來の自由に出来る生活を捨てるのは考物である、また煩累のやうに思はれる女の子の生先も自分で見てやる義務がある

ではないか、などとも思はれた。宮のお傍へと決めた和泉の心もこんなことでまた直ぐにぐらぐらとしてしまふのであつた。もう一段深く自分と云ふものを宮に見て頂けば何も解ることであるが、今までのやうに思はれて居る儘ではもう手紙もお書きすまい、近くへ參つてよく知つて頂ける時が來やうとして居るのであるからなどとまた和泉は思ふ時があつた。前の情人等から手紙を持たせてよこしても返事は無いとばかり云はせてすげなくして居た。そのうちに宮から手紙が来た。

私はあなたを信用して居たが、やはり馬鹿な目を見せられましたね。

と云ふやうなことが書いてある。

併し私は唯だ黙つて見て居よう。

と云つて筆が留められてあつた。和泉は茫となつて、唯だ高い胸の鼓動ばかりが感ぜられた。自分に就いての風評には呆れるばかりのことも少くないのであるが、無根のことは何れ人の知つてくれる時であらうと思つて居たうちに、宮の御親切にお促されしてお邸へ入らうと云ふ氣に自分になつたのを、以前の情人等の中に氣附いた者もあつて、其等から大仕掛な中傷が放た

れたものらしい。その人達は宮が自分をお捨てになるのを見ないでは満足が出来ないのであらう。目的を達するためには手段を選ばないのであらうと思ふと、和泉は悲しくて悲しくてならないのであつた。それにしても具體的にはどんなことが宮のお耳に入つたのであらうと思ふと恥しくて、和泉は御返事もしないで其のまま置いてあつた。宮は和泉の態度を恥に堪へないからであらうと思召した。

なぜ返事もくれないのですか。これでいよいよあなたの本心が解つたとも思へます、併し随分變るあなたの心ですね。私は人から聞き込んだことがあつたので、よもやと思ひながら、ひよつとあなたがそんな氣になつて居るのではないかと思つたものだから、あの手紙を書いて見たのです。

こんな手紙をまた宮はお送りになつた。和泉はこれで少し力が得られたやうな氣になつた。かうなつて見ると、その人の云つたと云ふことが知りたくてならないやうに思はれた。私が變つて居ると思召すなら、

今の間に君來まさなん戀しとて名もあるものを我行かんやは

と和泉はお答へをした。

君今は名の立つことを思ひける人から斯かる心とぞ見る

私はまたこれで腹を立てて居る。

と云ふお手紙が和泉へ來た。宮が戀におどおどして居る自分にお戯れになつたに違ひないとは解つて居ながらも、和泉は悲しくも苦しくも思はれた。それで、

私を助けると思召して、おいで下さいまし、どうしてもお逢ひがいたしたう御座います。

と云ふ手紙を書いて差上げると、

疑はじまた恨みじと思へども心にこころかなはざりけり

と宮から御返事が來た。

恨むらん心は絶ゆるかぎりなく頼む君をぞ我もうたがふ

とまた和泉から云ひ送られた。そして日が暮れると直ぐ宮が出ておいでになつた。

「よく人の噂に上る人だね、あなたは。またそんなことを聞いたものだから、よもやと思ひながら云つて見たのだよ。そんな風評を立てさせないために私は邸へお入りと云つて居るのだ。ねえ、早く來ることにお決めよ。」

などと宮はお云ひになつた。そして次の夜明にお歸りになつた。それから後お手紙は始終來るのであつたが、御自身で和泉の所へおいでになることはむづかしかつた。雨風のひどい日に今日に限つて宮のお手紙の無いのを和泉は物足りなく思つた。この淋しい家に居る自分に御同情が無いともお恨めしく思つた。夕方に、

霜枯はわびしかりけり秋風の吹くには萩のおとづれもしき

と云ふ歌を宮へ奉つた。

ひどい嵐だから、どうかと氣にばかりかかつて居ました。

枯れはてて我より外に問ふ人も嵐の風をいかが聞くらん

自分ながらも、こんなにあたのことを思ふのかと、きまりが悪い程です。

宮のこの御返事は和泉を限りも無く満足させた。宮は方違へに外へ行つておいでになると云ふことで、此處へ來るやうにと例の車で迎へにおよこしになつた。もう宮に征服されて居る自分の心は何事もお背きすることが出來ないと知つて、和泉は出掛けて參つた。さうして幾日かの間は晝も夜も甘い戀を囁き合つて暮した。もう何の躊躇もない、是非早くお邸へ入りたい、このままで參りたい、お別れしてどうして居られようと、和泉は思ふやうになつた。併し方違への日數が経つたので、宮はお邸へお歸りになり、和泉は家へ送られた。歸つて來た日は終日常よりも宮を堪へ難いまで戀しく和泉はお思ひした。

つれづれと今日數ふれば年月に昨日ごものは思はざりける

と云ふ歌をお送りすると、宮から、
私もさうだ。

思ふこと無くて過ぐししをとひと昨日を今日になすよしもがな

と云つても實際仕方のないことなんです。これにつけても是非傍へ来てくれることにして
欲しい。

と云ふ御返事が来た。和泉はそれでもまだ宮のお邸へ入ることを實行しかねて、唯だじつと
思ひ沈んだ日を送つて居た。いろいろの色を見せて居た木の葉も残りなく落ちて、空ばかりが
高高と明るい冬になつたのである。日の落ちて行く景色などに對して非常な心細さを覺えて、
和泉はまた、

慰むる君もありとは思へどもなほ夕ぐれはものぞ悲しき

と云ふ歌を宮へお上げた。

夕ぐれは誰もさのみぞ思ほゆる待ちわぶる君は人にまされり

可哀相ね、これから行きませう。

と云ふ嬉しいお返しがあつた。

宮はお歸りになつて翌朝早く、

どんな氣持ですか、今は。

と云つておよこしになつた。

起きながら明かせる霜のあしたこそまされるものは世に無かりけれ

と云ふ歌を和泉は奉つた。

宮はいつものやうな情の深い手紙をお書きになつて、奥に、

われ一人思ふは思ふかひもなし同じ心に君とありなん

と云ふ歌を附けて和泉へお送りになつた。
かへし、

君は君われは我とも隔てねば心ごころにあらんものは

和泉は病氣になつた。風邪のやうな容體で、重くは無いが苦しがつて居た。宮からはどうかどうかと頻りにお尋ねがあつた。快くなつた頃に、またどうかと云ふお尋ねがあつたので、少しよくなりまして、私はまたもう暫く生きて居たいと云ふ欲が出来ました。佛縁が無いので御座いませう。これも、

絶えし頃絶えねと思ひし玉の緒を君によりまた惜まるるかな

かうなのです。

と云ふ手紙を和泉は書いた。

非常に嬉しいことを聞かせてくれましたね。

玉の緒は絶えんものは契りてし長き心に結びこめてき

これは宮の御返事であつた。

十一月の初めの雪の降る朝、

神代よりふりはてにける雪なれど今日はことにも珍しきかな

と云ふ歌を宮はお送りになつた。和泉のかへし、

初雪といはれの冬も見しままに珍しげなき身のみ舊りつつ

こんなことを云ひ合つて二人の戀人は日を送つた。宮から、長く逢はないので戀しくてなりません。今日は久し振りで行かうと思つただけけれど、友人が來て詩の會をするとか云ひますから、また行けなくなつてしまひました。
こんなお手紙が來た。

いとまなみ君きまさすばわれ行かん文作るらん道を知らばや

と和泉が返しをしたのを宮は面白くお思ひになつて、直ぐまた、

我宿にたづねて來ませ文つくる道も教へんあひも見るべく

と云ふ歌をお遣しになつた。

霜の白い朝に、

今朝の自然に對してあなたはどんなことを思ひますか。

と宮は和泉へ云つてお遣りになつた。和泉は、

さゆる夜のかずかく鳴は我なれやいく朝霜を起きて見つらん

と書いて、また

雪も降り雨も降りぬるこの頃を朝霜とのみ起き居ては見る

とも書いた。此頃は雨なども多いのであつた。この晩宮がおいでになつた。いつものやうな身に沁むお話を遊ばした。

「あなたが私の所へ來てからね、私が家を出てしまつて僧になつたら、あなたはどう思ふだらう。」

こんなこともお云ひになつた。どうしてこんなお言葉をお出しになるお心持におなりになつたのであらう、何かのことが起つて來たのではあるまいかなどと思つて、和泉は悲しがつて泣いた。雲がかつた雨の降る頃である。少しもお眠りにならないで、宮はこの戀を未來の世まで變へまいと云ふやうな話ばかりを遊ばされた。自分が尼になつたと云つても宮はこれまでの交情をお變へになるやうな方ではない、自分の宮にお持ちして居る戀が一生に一度の眞實の戀であること、最後の戀であると思つて居ることを證すために自分は尼にならうと、和泉はこんな氣になつた。宮は和泉が餘り物を云はずにつくづくと悲しい様子をして居るのを御覽になつて

なほざりのあらしごと夜もすがら

とお云ひになつた。

落つる涙は雨とこそふれ

と和泉は云つた。朝になると宮は例の時よりも氣輕に物などをお云ひになつてお歸りになつた。

和泉は尼になると云ふことを、もとより人間として光明のあることでは無いと知つて居ながらも、心が一轉して人生を靜かに客觀的に見る事が出来るであらうと云ふことを樂みに思つて、さうしようかと考へるのであつた。併しまた感情に脆い心が其れを躊躇させた。さうしてこの煩悶を宮へお告げしないでは居られなかつた。

現實にて思へばいはんかたもなし今宵のことを夢になさばや

しかばかり契りしものを定めなきさは世のつねに思ひなせとや

私は御出家のお供をしたいと思つて居ります。またお先へさうならうかとも惑つて居ります。どう思召しますか。

宮から、

私も自分の云つたことに就いて、あなたへまた書いて上げたいと思つて居た。

うつつとは思はざらん寝ぬる夜の夢に見えつるうきことどもを

程知らぬ命ばかりぞ定めなき契りしことは住の江の松

と思はうではありませんか。あなたのやうにさう眞劍になるものではない。氣短かですね、あなたは、もうあのことは云ひつゝ無しにしませう。いろんな悲しさが胸に集つて來るから厭です。

と云ふ御返事が來た。女はその以後もよく出家のことを思つた。宮の一寸お話しなつたこと

にこれ程動かされる自分なのかと自ら憐まれる程であつた。もう尼になる仕度にかからうかなどと思つて居る或日の晝頃に、宮からお文があつた。

あなこひし今も見てしが山がつの垣ほに生ふるやまとなでしこ

唯だ古今集の此歌が一首書かれてあるだけであつた。思ひもかけずまた烈しい戀の焰を燃やせと火をつけられたやうに和泉は思つた。

お返しには、

戀しくば來ても見よかし千早振る神のいさむる道ならなくに

と云ふ伊勢物語の中の歌を一首だけ書いた。宮は和泉の書いた古歌を微笑んで御覽になつた。宮は此頃法華經を習つておいでになつた。

逢ふ路は神のいさめにあらねども法のむしろに居れば立たぬぞ

っしんなお歌が來た。かへし、

我さらば進みて行かん君はただ法のむしろをひろむばかりぞ

大雪の日に、雪の降りかかつた枝に附けて、宮から

雪ふれば木木の梢も春ならでおしなべて梅の花ぞ咲きける

と云ふ歌が送られた。かへし、

梅ははや咲きにけりとして折れば散る花とぞ雪の降るは見えける

その翌朝に、また宮から

冬の夜は戀しきことに目もあはで衣かたしき明けぞしにける

と云ふお歌が來た。

どうで御座いませう、眞實ですかしら。

冬の夜は目さへ氷に閉ぢられて明しがたきを明しけるかな

こんなことを和泉は書いてお返した。こんな遊戯じみたことに女は心を慰めながら暮して居るのであつたが、宮はまたどうお思ひになるのか、心細いことを多く書いた手紙などをお送りになつた。

やはり私は人間世界の競争に堪へられないで、僧と云ふ無心のものになる運命を持つて居るらしい。

こんな一節もその中であつた。

くれ竹の世世のふるごと思ほゆる昔語りはわれのみぞせん

と和泉は態と本氣にしないやうな御返事をしたのであつた。

くれ竹のうき節繁き世の中にあらじとぞ思ふしばしばかりも

とまた宮は云つておよこしになつた。

宮は和泉をお入れになる家や場所に就いていろいろとお氣をお揉みになつたのであるが、かうしたことに馴れない自分がすることの結果は、戀人のために不便な住所を與へるだけのことになるのであらうし、迎へる初めにはかれこれと人人から諷められることにもなるであらうから、それよりも簡單に自分が行つて手許へ唯だの侍女のやうにして伴れて來るがいいであらうとお思ひになつた。宮は十二月十八日の夜の夜に俄に和泉の所へおいでになつた。例のやうに

「一所においでなさい。」

とだけ宮はお云ひになつた。

「もうこんなことはこれ限りで御座います。」

と云ひながら和泉は車に乗つた。

「誰かもう一人女をお載せよ、都合さへそちらでよければ明日と明後日位一所に居たいか

ら。

と宮はお云ひになつた。平生は斯うした仰せは無いのであるから、もしやこの儘に長くお傍へ置かれるのでは無いかと和泉は思つた。そして一人の侍女に同車して行くことを命じた。

行つた處はやはり宮のお邸の中ではあるが、以前和泉の泊められた處ではない。室内の設備なども完全にされてあつて、侍女の幾人かを置いて差支へないやうになつて居た。

和泉は斯うして迎へられたことを結句幸であると思つて、仕度などをことごとしくして参ることも人に反感を起させることであるから、何時來たのかと却てその方で人に驚かれることになるのがいいと喜んだ。翌日は櫛の箱などをそつと自宅へ取りにやつた。

宮がそのうちにお出掛けになると云つて、お供に参る人達などが多く正殿へ集つて行く間はまだ夜のままで和泉の居る座敷の戸が閉されてあるのであつた。恐ろしいと思つては居ないが和泉は暗い中に居ることを氣づまりなことであると思つた。

「そのうち北の方の座敷へあなたを移さう、此處は餘り正殿へ近いので人がうるさいのだ。」と宮は云つておいでになつた。

「晝の間は始終私の所へ出て來る者や、院の出仕する人なんかが集つて來て居るのだから、かうして一所にも居られないことになるよ。あなたに愛想をつかされないかと心配でならぬい。」

宮は戯談半分に斯う云つておいでになつた。

「ええ、愛想づかしと云ふことばかりを私も苦勞にして居りますわ。」と和泉は云つた。

「私が居間の方で寝なければならぬ夜分なんかは氣を付けてお寝みよ。馬鹿な者はあなたを覗きに來たりするかも知れないからね。もう暫くして馴れると晝などはあの乳母の宣旨の居る座敷へ來て一所に居るがいいよ。私の晝の居間などは却て誰も來ないでいいのだよ。」

などと宮は云つておいでになつたが、そのお言葉通りに二三日して北の方の別殿へ和泉をお入れになつた。邸内の人人は初めて驚いた。夫人の方ではもとよりこれが大問題になつた。

「そんなことが無くつても何でも、私と云ふ者は宮様から少しも重ぜられて居ないのだけれど、身分も何も無いそんな女にまで侮辱をおさせになるのは餘りだね。」

と夫人は云つて居た。自分にも何とも御相談を遊ばされずに、このことを御實行遊ばしたのを見れば、宮がよくよく御寵愛な餘りにさうしないでは居られなくおなりになつて、總てを秘密に行つておしまひになつたことに違ひないなどと夫人が思つて鬱鬱と歎きに沈んで居るのを宮は哀れにお思ひになり、また人人の思はくをお憚りにもなつて、夫人の所によくおいでになるのであつた。

「奥様をお一人またお迎へ遊ばしたので御座いますつてね。初めから仰つしやつて下さいましたつて私がかれこれと申すもので御座いますか。それに私なんかには關りも無いことだと云ふやうに萬事を遊ばすのものですもの、私は世間の人に恥しくつて、恥しくつて。」

夫人は泣く泣く斯う云ふのであつた。

「私の召使なんだから、わけもなくあなたの召使としても許されることだと思つて相談をしなかつたのだよ。あなたが誤解をして居るものだから中將なんかも憤つた顔を私に見せるよ。困つてしまふぢやないか。もともと私の髪を撫でつけさせたりする役を云ひつけようと思つて呼んだだけのものなんだよ。用があれば此處へも呼んで来てさせるがいいのだよ。」

と宮はお云ひになつた。夫人は情けなく思ふ風でその儘黙つて居た。

日が経つて和泉はやうやう宮のお邸に馴れた。宮は晝も和泉をお居間へお置きになつて、お髪上げの用を初めお身の廻りのことを皆おさせになつた。もう今では片時も傍をお離しにならないのであつた。これまでは夫人が時時晝間などに宮のお居間へ来て居たのであるが、それは次第に稀になつて行つた。夫人の歎きの甚しいことは云ふまでもない。

正月になつて、元日に冷泉院へ拜禮に行く役人達が先づ此方へ多く来た。宮も院へお行きになるのであつた。和泉が覗いて見ると、美装した今日の人人の中でも、誰にも勝つた美男は帥の宮でおありであつた。それに就けても自身が恥ぢられた。夫人の居る座敷の方の御簾際にも女達が多く出て来て居た。宮のお姿よりも、高官や公達の春装束よりも、其女達には宮のお居間でお見送りして居る和泉を見ようとする好奇心の方が主であつた。われもわれもと隙間を争つて居るのが見苦しい。

日が暮れてから宮はお歸りになつた。高官達が多くお供に參つて、それから管絃の御遊などがあつた。思ひもかけぬ高い處を住所にする身分になつたと和泉は思つて、華やかなことなど

の何一つ無かつた實家のことなどを思ひ出した。

宮家では邸内のつまらない侍までも和泉のことに就いて悪評をした。夫人の心の持ちやうが間違つて居るから斯うなるのであると宮はお思ひになつて、夫人との仲が疎くなつて行くばかりであつた。和泉はこのことを自分の罪のやうに思つて、夫人に同情はして居るが、力の及ばぬことは黙つて見て居る外はなかつた。夫人の姉は東宮の女御であつた。東宮の御寵愛の極めて深い、勢力のある人である。その人から夫人へ手紙が來た。

宮様は大變な評判を取つていらつしやいますね、眞實なのですか。あなたがそんな目に逢つて居ることは、私の頭にも槌を加へられて居ることのやうに思はれますよ。一度夜分でもおいでなさいな。よくお話がしたいのですから。

と云ふのであつた。これ程のことでも無くても世間の人はやかましく云ふのであるから、一人の妖姫のために掻き亂されて居る家庭のことはどれ程閑暇の多い人達にはいい話題になつて居るかも知れないと、今更のやうに姉の手紙を見ながら夫人は思つた。そして、

お手紙をありがたう。生れつき不運な私だと思つて居ますから、大抵のことは諦めて居まし

たけれど、この頃のことばかりは情けなくなりました。それで是非伺つて見たいと思つて居ましたの。お小さい宮様方のお目にかかりまして、それで私はこの頃の心をも慰めて頂けるやうに思つて居ましたの。迎へにお車を下さいませ。私の方から出掛けてまいりますこととはむづかしい御座いますの。それは私が何を申しても唯今では耳へ入れて貰へまいと思ふからです。

こんな返事を書いた。

夫人は家を出て行く仕度を初めた。留守の間に見苦しく思はれるやうな處も皆よく整理させた。

「私は暫く姉さんの處へ行つて來よう。かうして暮して居ることは私にも辛いことだし、宮様にしても私が居るとお思ひになると、この御殿の方へ出にくく思召すのもお氣の毒だから。」

と夫人は侍女に云つて居た。

「眞實に人の口の上る種ばかりをお作り遊ばす宮様で御座いますね。あの女が初めて参りま

した時も宮様がわざわざ御自身でお迎ひにおいで遊ばした相で御座いますよ。この頃は晝間もあの女の部屋へ三度四度とおいでになる相で御座います。あなた様が女御様の方へおいで遊ばすのはお宜しいことで御座いますよ。なるべくもう宮様へお話をなさいませすにおいで遊ばしましょう。」

などと侍女の一人は云つた。皆これに劣らないことを思つて和泉を憎んで居るのである。宮はそれを辛く思つておいでになつた。宮も夫人の出て行かうとするのを薄薄知つておいでになつた。自分には何の苦痛も感じないことである、氣の毒な人を近くへ置いて置くよりは氣樂でさうなつた方がいと思つておいでになつた。

夫人の兄弟達が女御の旨を受けて迎へに來た。宮はこれをお聞きになつて、いいよその日が來たのかと思召した。宮のお乳母の宣旨は部屋で使つて居る女などが、

「奥様はすつかりとお引き拂ひになつて女御様の方へおいで遊ばすらしい。」

と噂するのを聞いて、周章で宮のお居間へ來た。そのことを申し上げて、

「東宮様とお仲違へのやうになりましたは大變で御座います。ともかくも直ぐに彼方へおい

で遊ばして奥様をお宥め遊ばしませ。」

一大事のやうに斯う云ふのを、傍で聞く和泉の心は苦しくてならなかつた。自分のために人の苦勞をすることを思つては、暫らくこのお邸を出て居ようかと思ふのであつたが、それも自分のためにいいことでもあるまいと思はれた。かうして居ても氣苦勞の絶えないことであらうと悲觀もされた。

夫人は宮に然氣ない風をお見せして居た。

「眞實なの、女御さんの處へ行くのは。何故私にさう云つて車の用意なんかさせなかつたの。遊びに行くなら行くでいいがね。」

と宮はお云ひになつた。

「私から參るのでは御座いませんの、彼方からね、何ですか、迎ひが參りましたから。」

と夫人は云つただけであつた。

宮の夫人の手紙や女御の心持などは第三者になつて書いた和泉の想像であるから、さう思つて欲しい。

紫式部日記

夏から初秋に移つたこの世界に最も趣の多い所があつた。それは土御門殿である。池を中心として立ち繞つて居る大木の梢にも、小流を挾んだ草原にも、いろいろの紅葉が出来て、上にはすべての色を引き立てるやうな美しい空があり、下には不斷經の聲が響き、白金のやうな快い風に涼しい水の音が夜通し混つて聞えた。

中宮様もお近く奉仕する私達がして居る夜話を一處にお聞きになつて、御産期に近いお身體の苦しさを然氣なくしておいでになつた。お美くしい御容貌や御様子をお賞め稱へ申し上げては解り切つたことを今更云ふやうで可笑しいが、自分は人生の苦さを味つて居るものが、せめてもの慰めを得ようとするのには、このやうなお方を主人にして宮仕をするのが一番宜いと云ふことが云ひたいのである。過去を悲んで灰色になつて居る心もお傍に居る間は全て變つて居る。自分ながらさうとは信じられない程變つて居る。

まだ夜明に間のある月光が鈍く射して木立の中などは暗い。

「お格子をお閉めさせしませう。けれど下女官はまだ部屋に居るでせうね。」

と云つて居る女達に由つて男役人の藏人が呼ばれたりした。後夜の鐘が高く鳴らされたのに

續いて、五つある祈禱の壇の上から僧達が一齊に祈りの聲を發した。莊重な宗教的氣分が漂つて尊佛の情緒が今更ながら心を支配した。東御殿に席を構へた觀音院の餘慶僧正が二十人の伴僧と一處にこの時刻以後のお加持の役をするために本殿へ來るのであつた。その人人が細御殿の縁を踏む音の高さなども他のいかなる場合にも無い特種な音響のやうに聞かれた。法住寺の院源座主は馬場御殿に、遍昭寺の僧都は圖書御殿に各休息所を與へられて居るのである。この僧達が入代つて下つて行くのを見て、立派な、形の好い唐風の屋根橋などを渡つて庭の向ふの別殿へ入る姿などを身に沁む趣の一つとして自分は想像して見た。此處からはもとより見えな

い。清禪阿闍梨は大威徳明王の尊像の前で祈つて居た。今日の晝間奉仕する侍女達が多く部屋から上つて來て夜も明けた。自分は東の細御殿の端の部屋へ歸つて來た。

朝景色の美しくしさに見入つて居ると、まだ薄霧が降つて居て、露も草原に充滿溜つた頃であるのに、殿様が庭へ出てお出でになつた。殿様は隨身の人に指圖して小流の岸に濡れた木の葉の溜つて居るのなどを取り捨てさせておいでになつた。階段の前に非常によく咲いた女郎花のあるのを殿様は一枝お折りになつて上へお上りになつた。殿様は自分の部屋へお出でになつ

て、几帳の上から女郎花をお見せになつた。美しい御風采に對して、昨夜のままで作らずに居る自分の顔が恥しくて、

「即興を早く、早く。」

とお云ひになるのを機會に、硯の置いてある方へ身體を片寄せた。

女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそ知らるれ

微笑してお點頭きになつた殿様は、返歌をして下さるために硯を出せとお云ひになつた。

白露はわきても置かじ女郎花こころからにや色の染むらん

しみりとした夕方に自分が朋輩の宰相さんと二人で話をして居る室の外へ、殿様の御子息の頼通三位さんが來ておいでになつた。三位さんはお年の若い割合には非常に沈着いた態度で御簾の端を少し撥ねては話の中へ意見を混せて下さるのであつた。

「美しい女は一寸搜しても見附けられるでせうがね、性格に缺點の少い人と云ふものはな

かなか無いものなんでせうね。」

などと静かな調子で云つておいでになるのを見て、人生の味がよく分らない方だなどこの方を評して居るもののあるのは間違だと自分は思った。敬意を拂ふことを相手に惜ませない方であると思つた。餘り長くはおいでにならないで、「女郎花多かる野邊に宿りせば」と古歌を口誦みながら立つてお行きになつた時の様子などは、小説の作者に賞めて書かれた若い男のやうであつた。自分には斯うした何でもないことで今も忘れないことがあり、また非常に面白いと思つたことを、時間の経つのと一處に忘れて行くこともあるのであつた。

碁の勝負に負けた播磨守が勝者の關白家へ饗宴を持つて來た日の式場を、自分は客達が悉く退散した後で見た。織巧な飾り足の附けられた碁盤に、上は洲濱臺のやうにして海邊の景色が作つてあつた。水を見せた線の中へ蘆手で、

紀の國のしらの濱に拾ふてふこの石こそはいはほともなれ

と書いてあつた。意匠を凝した扇を持つことが流行り出した時分のことである。

八月の二十日過ぎからは高官もそれ以下の役人も、平常からこの土御門殿へ出入して居る人達は大抵宿直をして歸らなかつた。細御殿の通ひ橋や別殿の縁などでうたた寝をして夜を明すのである。その人達は何時もいろいろなことを思ひ附いて遊んで居た。琴や笛の稽古の十分でない若い公達などは、そんな面倒なものよりはと云ふやうに、讀經の競争をしたり、七五調の長い歌の朗讀などをするのであるが、かうした古典的な宮中などと違つた所ではそれも面白く聞かれないでは無かつた。或時はまた中宮大夫の齋信、經房左中將、懷平左兵衛督、濟政少將などで管絃の合奏が行はれることもあつた。管絃會として本式の夜遊をすることは殿様がおさせにならなかつた。中宮の侍女として籍を持つて居る者で家庭の事情などの爲に長い間よう勤めなかつた人なども、お産のことをお氣遣ひ申して我も我もと參るので、賑かに思はれることばかりが多く、自分の周圍に少しの静閑をも見出すことが出来なかつた。

二十六日には中宮様から豫ねて分配されてあつた薫物の、それぞれ工夫して調合されたのがその侍女に由つて持ち出されて、御前で其れを焚く試みがあつた。香はお手許へお納めになつた残りをまた其等の女達へ分けてお與へになつた。一所懸命に前日まで小さい香の塊を作つて居

た女達が大勢集つて居た。

お居間から下つて自分の部屋へ行かうとする途中で、辨の宰相さんの部屋を一寸覗くと、その人は晝寝をして居た。紅紫薄紫などを重ねて著た上に濃い紅の糊打物の上著を著て居た。顔を襟の中へ隠すやうにして硯の蓋を枕にして居るのである。髪は掛かつた額のあたりが云ひやうもなく美しく艶である。繪に描いたお姫様と云ふもののやうに思はれるので、その口の上に乗せた袖を引つぱつて、

「小説に書いてある人のやうね」

と云つたら、辨の宰相さんは自分を見上げて、

「妙な方ね、あなたは、寝て居るものをびつくりおさせになるつて。」

と云つた。そして少し起き上つたその顔が心ほど赤味走つて居たので、ますます自分は美くしいと思つた。美人もまたその時と場合で一層美の添つて見えることのあるものである。

九月の九日に菊の被せ綿を兵衛さんが持つて来て、

「これはね、奥様がね、特にあなたへ下さいましたの、十分に老と云ふものをこれで拭き取

つておしまひなさいと云へと仰つしやいました。」

と云ふのであつた。

菊の露わくるばかりに袖濡れて花のあるじに千代は譲らん

と云ふ歌を賜物のお禮にさし上げようとして居るうちに、

「もう奥様は御自身のお居間の方へお歸りになりましたよ。」

と云ふものがあつたので、わざわざ遠くからさし上げる程の作ではないと思つてその儘にした。

この晩自分が御前へ出た頃には月がもう上つて居た。お付き申して居る小少將、大納言などと云ふ人の裳の端が御簾から縁へ出る程外へ近い處に宮様は出ておいでになつた。火入をお取り寄せになつて何時かの香をお焚きになつたりした。人人の口からは見渡される庭の景色の美しくさが稱へられ、蔦の紅葉は何故まだよく染らないのであらうかと云ふやうなことが云はれたが、宮様の御様子には平生よりもお惱ましいやうにお見えになつた。お加持の僧がそのために

召されるのであつたが、この座敷は何時も御加持僧の詰める所になつて居るので、自分達は宮様の御座をお移させ申した。そのうち部屋の方で自分をお呼ぶ者があると云ふので御前を下つた。自分は一寸休息をするつもりで目を閉じたが、その儘寝入つてしまつた。夜中頃から御産氣が附いたと云ふ騒ぎが起つて來た。

十日の鶏明に中宮様のお居間へ御産所としての設備が加へられた。宮様はこれから白の御帳へお移りになるのであつた。殿様を初め子息方や四位五位の官人が御帳の垂絹を棹に掛けて廻つたり、新しいお敷蒲團を持ち運んだりするのに、座敷の中を右左に走つて居るのが目まぐるしいやうであつた。此日は夜になるまでお横におなりになつたり、お苦しさにまた坐つてお見になつたり遊ばす許りで御出産をお喜び申すことが出来なかつた。假に人へ移して憑かせた物怪に御産室を去らしめようとして祈る聲が高い。今迄に此處へ集められてあるのはもとより、今日になつてまた隠れた寺や深い山里などへ使が出されて、效驗をよく現はすと云ふ評判のあるものをことごとく網羅し盡されたこの多勢の僧達が誠意を以てする祈禱には、過去、現在、未來に亘る人間の運命を握つておいでになる佛も動かされずには居られまいと思はれた。陰陽

師を職にして居るものはまた此處へ有るだけが呼び集められて居るのであるから、それに由つて祈りを受けておいでになる八百萬の神は残らず眞劍になつて中宮様のお産をお助けになるであらうと思はれた。あとからあとから各所の寺へ誦經を命ぜられる使が立つて十一日の朝になつてしまつた。宮様の御帳の東に當る座敷には宮中からお遣はしになつた女官が多勢居た。西の方では一隻の屏風をぐるりと立て、出入り口へ几帳を立てて一つ一つの部屋のやうにした所に、それぞれ物怪の移つた人を入れて、受持の僧が一人づつ附いて一所懸命に目に見えない靈鬼を負かして追ひ歸さうと罵り散らして居るのであつた。南の室には僧正や僧都が重つて坐つて居ると見える程大勢集つて、生きた不動尊をも祈禱の聲で呼び出せるなら呼び出して見せよう云ふ意氣込を現はして、佛に歎願したり、恨みを述べたりするのに聲を嗔して居るのが尊く思はれた。北の室の襖子と御帳との間の狭い所に女達が侍して居た。後で數へると、その人數は四十幾人であつた。自分達は身じろぎすることも容易では無いのである。そして無暗に神経が興奮して何が何であるやらまるで解らない。今になつて實家から出て來る人などは却て氣が確であるために席を得ることも樂に出來るのであつた。裳の裾や袖の遣り場に困つて居ない人